

I. 平成18年度事業報告(案)

1. 会勢報告

{総務担当：谷島 一嘉}

【総 数】

(単位：人)

会 員	平成18年4月1日	平成19年3月31日	新 入 会 員	退 会 者	増 減
		2,035	1,935	83	183

会員資格
変更

正会員：	1,898	1,803	48	158	-110	+15
準会員：	137	132	35	25	+10	-15

【内 訳】

(単位：人)

支 部	平成18年4月1日	平成19年3月31日	新 入 会 員	退 会 者	増 減 ()：支部間 の移動
北 海 道	42	41	3	4	-1(0)
東 北	63	59	1	4	-3(-1)
関 東	1,152	1,093	38	101	-63(+4)
東 海	190	176	3	18	-15(+1)
関 西	341	330	28	35	-7(-4)
中 国・四 国	133	132	6	7	-1(0)
九 州	96	88	3	11	-8(0)
国 外	18	16	1	3	-2(0)
賛 助 会 員	41社 42口	43社 44口	3社 3口	1社 1口	2社 2口

2. 事業報告

{総務担当:谷島 一嘉}

- (1) 社団法人日本人間工学会を実現するため、社団法人日本人間工学会推進委員会を中心に主務官庁の要請に対応するとともに、早期認可についての折衝を進めた。
- (2) 第47回大会を岡田明大会長のもと平成18年6月9日～11日に、大阪市立大学において開催した。
- (3) 評議員会および定期総会を平成18年6月10日に大阪市立大学において開催し、平成17年度事業報告・収支決算および平成18年度事業計画・収支予算を審議の上、決定した。
- (4) 理事会を5月20日、6月9日、9月11日、11月20日、1月26日、3月12日の計6回開催した。
- (5) 機関誌「人間工学」の第42巻2～6号および第43巻1号の計6冊を発行した。
- (6) 認定人間工学専門家資格認定試験(A方式試験)を実施し、合格者に対して登録手続きを経て認定人間工学専門家2名の登録を行った。筆記試験免除条項を適用した資格認定試験(B方式試験)についても2回実施し、2名の登録を行った。平成19年3月31日現在、認定人間工学専門家は153名である。
- (7) 広報担当、日本学術会議担当、人間工学技術戦略検討会、社団法人日本人間工学会推進委員会、編集委員会、国際協力委員会、ISO/TC159国内対策委員会、人間工学JIS委員会、ユーザビリティ委員会、表彰委員会、安全衛生における人間工学要求事項委員会において各事業を進めた。
 - 広報担当に関する事業活動においては、学会内の委員会、支部、研究部会と協力し、ホームページを中心に広報活動を推進した。人間工学技術戦略検討会、総会、大会報告の掲載など新たなページを作成した。また、電子メディアの特徴を生かして、イベント案内、人材募集、学会における各種事業の案内なども積極的に情報提供を行った(広報担当)。
 - 日本学術会議に関する事業活動においては、日本学術会議から発信される情報を本学会のホームページに掲載するなど連携強化に努めた。また、学術会議主催の安全工学シンポジウム2006、2007に関する運営、準備に参加した(日本学術会議担当)。
 - 人間工学技術戦略の検討に関する事業活動においては、人間工学技術ロードマップドラフト案を作成し、国際会議で発表するとともに本ロードマップの提案に向けて意見収集と検討を行った(人間工学技術戦略検討会)。
 - 本学会の社団法人化に関する事業活動においては、文部科学省担当官との折衝を継続するとともに、文部科学省へ提出済みの社団法人化申請書類等につき、現在の学会活動の進捗に整合させるための見直しを行った上で再提出した(社団法人日本人間工学会推進委員会)。
 - 編集に関する事業活動においては、学会誌の定期発行業務を遂行するとともに、奇数月に通常編集委員会、偶数月に電子編集委員会を開催し、査読業務の効率化・迅速化を進め、投稿原稿の査読期間の短縮化を図った。さらに投稿規定に関して、規定頁数の変更、掲載料の改定を行った(編集委員会)。
 - 国際協力に関する事業活動においては、IEA(国際人間工学連合)理事会(マーストリヒト)に参加したのをはじめ、IEA2006、JES/ESK(大韓人間工学会)合同シンポジウム2006への対応など、様々な国際活動に対応した(国際協力委員会)。
 - ISO/TC159国内対策に関する事業活動においては、規格原案審議のための国内委員会および国際会議に出席し、41件のISO規格原案の投票を行い、10件のISO規格の発行に寄与した(ISO/TC159国内対策委員会)。
 - 人間工学のJIS規格検討に関する事業活動においては、1件のJIS規格原案の作成を行った(人間工学JIS委員会)。
 - ユーザビリティに関する事業活動においては、学校のコンピュータ利用に関わる人間工学課題解決のための情報収集、電子ディスプレイ新技術をめぐる人間工学上のガイドライン関連課題の検討を行うとともに、他の関連ユーザビリティ検討団体と連携を図った(ユーザビリティ委員会)。

- 表彰に関する事業活動においては、選考基準に基づき平成 19 年度大島正光賞および研究奨励賞の受賞論文を選考した(表彰委員会)。
 - 安全衛生における人間工学要求事項に関する事業活動においては、安全衛生における人間工学要求事項の骨子案の作成や安全工学会との合同研究会を継続的に開催し、その成果を公開した(安全衛生における人間工学要求事項委員会)。
- (8) 第 17 期役員選挙管理委員会に関する事業活動においては、第 17 期(平成 19 年～21 年)役員選挙(評議員選挙、理事・監査選挙、会長・副会長選挙)を実施した(第 17 期役員選挙管理委員会)。
 - (9) 支部活動、研究部会活動の活性化を進めた。7 支部と、医療安全研究部会、衣服人間工学部会、航空人間工学部会、アーゴデザイン部会、感性情報処理・官能評価部会、看護人間工学部会、海上人間工学研究部会、ジェロンテクノロジー研究部会、口と健康部会、情報社会人間工学研究部会、聴覚コミュニケーション部会、人間融合ロボット分野アカデミックロードマップ研究部会、触覚インタラクション研究部会の計 13 研究部会が活動を行った。
 - (10) 認定人間工学専門家に関する事業活動においては、資格認定試験(合格 4 名)を実施するとともに、資格保有者の再認定制度を制定した。若い年代層を対象とした人間工学準専門家、人間工学アシスタントの 2 つの新資格を創設するとともに、資格の国際化に向けて IEA による資格認証を得るための申請を行った(認定人間工学専門家部会)。
 - (11) 大韓人間工学会との協力協定に基づいて、JES/ESK 合同シンポジウムを大阪において第 47 回大会時に開催し、36 件の発表が行われた。
 - (12) 賛助会員を対象とした講演会(兼、一般に向けた人間工学啓発のための講演会)を平成 19 年 1 月 26 日に東京において開催し、垣本由紀子氏が主題「安全運航に関する現状とヒューマンファクター的アプローチ-航空事故・インシデントを中心にして-」について講演を行った。
 - (13) 平成 18 年度大島正光賞および研究奨励賞を各受賞者に授与した。
 - (14) 人間工学に対する社会的ニーズに的確かつ迅速に応えるために、横幹連合への参加など他学協会等との共同事業を広く展開した。
 - (15) 関連学術団体等との連絡および協力として、39 件の共催・協賛・記事掲載を行った。

3. 担当・委員会活動

3-1. 広報

{広報担当:吉武 良治}

- (1) 平成 18 年度は、学会内の委員会、支部、研究部会等と協力し、ホームページを中心に広報活動を推進した。平成 18 年度の新たな取り組みとしては、人間工学技術戦略検討会のホームページのオープン(2007 年 1 月)、平成 18 年度の総会及び第 47 回大会の報告の掲載(2007 年 1 月)、平成 18 年度の総会資料の掲載(2007 年 1 月)、IEA President's Letter の掲載(適宜)などがあった。2006 年 4 月から 2007 年 3 月までのホームページへの総アクセス数は 60916 件であり、ひと月平均約 5000 件のアクセスがあった。これまで電子メディアの特徴を生かしたタイムリーな情報提供の実施とコンテンツの充実を図ってきた。なお平成 18 年度における主な更新状況は以下の通り。その他、イベント案内、人材募集、学会における各種事業の案内などは積極的に情報提供している。
- (2) 平成 18 年 4 月～平成 19 年 3 月までのホームページの主な更新・新規掲載状況は以下の通り。
 - 経済産業省より発表された「人間生活技術戦略」(2006 年 4 月 18 日)
 - 日本人間工学会第 47 回大会の事前案内情報(2006 年 5 月 16 日)
 - 人間工学専門家部会の認定試験のページに「2006 年度の人間工学専門資格認定試験実施のお知らせ」(2006 年 5 月 19 日)
 - 第 9 回宇宙環境利用に関する地上研究の公募情報(2006 年 5 月 30 日)
 - 「人間工学 ISO/JIS 規格便覧 2006」を公開し、お知らせ(2006 年 6 月 8 日)
 - 日本学術会議より公表された「動物実験の適正な実施に向けたガイドライン」(2006 年 6 月

12日)
アーゴデザイン部会主催「コンセプト事例発表会」の発表者募集案内(2006年6月12日)
聴覚コミュニケーション部会の第1回研究会のお知らせ(2006年7月22日)
平成19年度科学研究費補助金の公募情報を学術会議ページで案内(2006年9月4日)
日本学術会議第149回総会において、採択された声明「科学者の行動規範について」(2006年10月6日)
「認定人間工学専門家」のページに2006年11月に新規登録された認定人間工学専門家の氏名(2006年11月23日)
平成18年度総会、第47回大会の報告(2007年1月3日)
人間工学技術戦略検討会のホームページをオープンし、本検討会で作成した「人間工学技術戦略ロードマップ」を公開(2007年1月5日)
日本人間工学会第48回大会のホームページが公開され、リンク(2007年1月13日)
認定人間工学専門資格制度に2つの新資格の導入(2007年2月9日)
安全工学シンポジウム(2007年7月5～6日開催)の開催案内(2007年2月19日)
触覚インタラクション研究部会主催の国際ワークショップ(Workshop on Tactile and Haptic Interaction)のお知らせ(2007年3月14日)

3-2. 日本学術会議

{日本学術会議担当:青木 和夫}

(1) 日本学術会議との連携の拡充

- 1) 日本学術会議から発信される情報は随時日本人間工学会のHPに掲載し、連携強化に努めた。
- 2) 日本学術会議からのアンケート「科学者の行動規範」(暫定版)等に関する調査への回答案を作成した。

(2) 日本学術会議主催の安全工学シンポジウムの準備・運営

- 1) 安全工学シンポジウム2006(幹事学会:電気学会、2006年7月6日、7日)の実行委員となり、運営に参加した。
- 2) 安全工学シンポジウム2007(幹事学会:建築学会、2007年7月5日、6日)の実行委員となり、準備に参加した。

3-3. 人間工学技術戦略検討会

{人間工学技術戦略検討会主査:藤田 祐志}

- (1) IEA2006で(2006年7月11～14日)、経済産業省と共同で本活動についてポスター発表を行い、IEA幹部および主要国の学会の好評を得た。なお、発表の根拠となった人間工学技術ロードマップドラフト版は平成17年度に本検討会がとりまとめている。
- (2) IEA新会長Caple氏に対して本活動を紹介(2007年1月12日)、IEA活動との連携について道を開いた。
- (3) 理事および有志の参画を得て「日本人間工学会技術戦略ロードマップ等説明会」を開催(2007年3月13日)、人間工学技術ロードマップの更新について方向性を得た。
- (4) 経済産業省による人間生活技術戦略ロードマップの作成に協力した。その成果は、2007年4月に「五感で納得できる暮らしを目指してー人間生活技術戦略2007」としてまとめられた。
- (5) 横幹連合関連の活動として計測自動制御学会とりまとめによるアカデミーロードマップ作成に参加協力した。

3-4. 社団法人日本人間工学会推進委員会

{委員長:齊藤 進}

日本人間工学会の法人化は、平成12年に閣議決定された行政改革大綱を端緒とした国の公益法人制度改革等の進捗と連動しており、文部科学省の内認可が未だなく法人設立総会を

開催するには至っていない。国の公益法人制度については平成 18 年 5 月に、公益社団法人制度の抜本的な制度改革としての「公益法人制度改革関連 3 法」が成立しており、平成 20 年度内に施行されることとされている。それまでの間は、現行の認可制度が存続しており、文部科学省では、これまでの申請事案について、審査を継続中としている。

社団法人日本人間工学会推進委員会では、文部科学省担当官との接触を継続するとともに、法人化申請のため文部科学省へすでに提出している社団法人日本人間工学会設立準備に係る書類及び正式申請時に必要となる書類等につき、現在の学会活動の進捗に整合させるための見直しを行った上で、平成 18 年 4 月に再提出した。

また、平成 19 年 2 月には、文部科学省の要請で、人間工学に関する分かりやすい図表・イラスト等を追加提出し、法人化担当官と早期認可についての折衝を行った。文部科学省へ追加資料として提出したものは、人間工学の概略及び国際動向、人間工学における人間特性の理解と利用、人間工学が貢献する領域、本学会の会員構成、本学会と他学会との関連等を説明したイラスト及び我が国の大学における人間工学講座及び研究室一覧表である。

なお、平成 18 年度に実施した第 17 期役員選出に関しては、国の指導方針に基づき文部科学省へ提出している法人化定款案に従い、平成 18 年 5 月の第 124 回理事会において選挙内規を改定し理事定数の縮小を行なった。

3-5. 編集委員会

{委員長:加藤 象二郎}

(1) 学会誌「人間工学」の編集・発行状況

- ・平成 18 年 4 月:第 42 巻 2 号(104 ページ)原著 7 編、技術報告 1 編、資料 1 編、短報 4 編 他
- ・平成 18 年 6 月:第 42 巻 3 号(70 ページ)原著 5 編、総説 1 編、短報 1 編 他
- ・平成 18 年 8 月:第 42 巻 4 号(52 ページ)原著 4 編、短報 1 編、紹介コーナー1 編 他
- ・平成 18 年 10 月:第 42 巻 5 号(78 ページ)原著 7 編、短報 1 編、紹介コーナー3 編 他
- ・平成 18 年 12 月:第 42 巻 6 号(63 ページ)原著 5 編、短報 3 編 他
- ・平成 19 年 2 月:第 43 巻 1 号(52 ページ)原著 5 編、短報 1 編 他

(2) 編集委員会の開催

奇数月に編集委員会を開催し、必要に応じて偶数月には電子編集委員会を開催した。

(3) 投稿数および査読者数

投稿された原稿数とそれに対する査読依頼者数は以下のとおりであった。平成 18 年度の投稿総数は 54 編、査読者数は 143 名であった。

- ・平成 18 年 5 月(第 13 回委員会)
投稿数 11 編(原著 9 編、短報 1 編、資料 1 編):査読依頼者数 30 名
- ・平成 18 年 7 月(第 14 回委員会)
投稿数 9 編(原著 6 編、短報 3 編):査読依頼者数 21 名
- ・平成 18 年 9 月(第 15 回委員会)
投稿数 9 編(原著 8 編、短報 1 編):査読依頼者数 25 名
- ・平成 18 年 11 月(第 16 回委員会)
投稿数 11 編(原著 9 編、短報 1 編、資料 1 編):査読依頼者数 30 名
- ・平成 19 年 1 月(第 17 回委員会)
投稿数 7 編(原著 5 編、短報 1 編、資料 1 編):査読依頼者数 18 名
- ・平成 19 年 3 月(第 18 回委員会)
投稿数 7 編(原著 6 編、短報 1 編):査読依頼者数 19 名

(4) 紹介コーナー設置の継続

第 41 巻 4 号より学会誌に「紹介コーナー」を設け、私の研究紀行、学会等への参加記録、活動記録、書評などをまとめて紹介している。

(5) 編集委員会のホームページの更新

平成 18 年度の委員会開催予定日等をホームページに掲載した。また、発行済みの学会誌第

42 巻 6 号までの目次を検索できるようにホームページ内の情報を更新した。

(6) 学会誌の編集印刷会社の見直し

編集印刷会社の見直しを行った結果、編集印刷会社(三美印刷株)は変更せずに、1 号(64 頁相当)あたり約 135 万円であった経費を第 42 巻 2 号から約 105 万円で再委託した。

(7) 査読期間の短縮

できるだけ迅速な査読を心掛けるため、平成 16 年 10 月から続けている副査の査読期間短縮(従来 1 ヶ月であったものを 2 週間に短縮)を継続した。

(8) 掲載までの最短日数

投稿原稿の受付から掲載可となった最短の月数は 2 ヶ月で、その平均は 6~7 ヶ月(前年度は 5~6 ヶ月)であった。

(9) 投稿原稿の採択率

第 16 期編集委員会(約 3 年間分)で受け付けた投稿原稿で採否の結果がでた投稿原稿 171 編のうち、採択されたのは 104 編(採択率約 61%)であった。なお、筆頭著者が学会員の投稿原稿 144 編のうち採択されたのは 91 編(採択率約 63%)であり、筆頭著者が非学会員の投稿原稿 27 編のうち採択されたのは 13 編(採択率約 48%)であった。

(10) 掲載料等の見直し

投稿規定の中で、規定頁と掲載料の見直しを行い、以下の改定案が理事会で承認された。

☆規定頁について

従来、原著、資料の規定頁は 6 頁であったが、これを 8 頁に変更する。

☆掲載料について

従来、全ての投稿原稿について、筆頭著者が会員、非会員に係わらず、その掲載料は以下のとおりであった。

	規定頁まで	超過頁
非 T _E X 形式	10,000 円/頁	20,000 円/頁
T _E X 形式	8,000 円/頁	16,000 円/頁

これを、以下のように変更する。

筆頭著者が会員の場合

	規定頁まで	超過頁
非 T _E X 形式	7,500 円/頁	20,000 円/頁
T _E X 形式	6,000 円/頁	16,000 円/頁

筆頭著者が非会員の場合

	規定頁まで	超過頁
非 T _E X 形式	10,000 円/頁	20,000 円/頁
T _E X 形式	8,000 円/頁	16,000 円/頁

☆図版作成料と別刷料について

今回、変更せず、従来どおりとする。

なお、この改定は、「人間工学」第 43 巻 3 号(6 月 15 日発行予定)の巻頭色ページで周知徹底し、平成 19 年 7 月 1 日以降に編集委員会事務局で受理され、これが査読を経て学会誌に掲載された投稿論文を対象とする。

(11) 第 16 期編集委員会の業務

第 16 期編集委員会が平成 19 年 6 月 2 日の総会時まで業務を継続し、総会以降に第 17 期編集委員会に引き継ぐ。新しい投稿先等については、「人間工学」第 43 巻 3 号(6 月 15 日発行予定)の巻頭色ページで周知する。

3-6. 国際協力委員会

{委員長代理:堀江 良典}

- (1) IEA 理事会:平成 18 年 7 月 8 日～7 月 9 日 マーストリヒト(オランダ)
学会から council member として堀江理事、ならびに alternate member の富田理事が出席。会議冒頭 5 月 7 日に逝去された秋田委員長への追悼。各国の年次活動報告として日本からは資格制度の現状、JES ロードマップなどを中心に報告した。
- (2) 委員会開催
担当理事による会合を 4 回開催。その他 E-mail による緊密な連絡を実施
- (3) 理事会審議・報告
IEA2006、JES/ESK Joint Symposium 2006 への対応など
- (4) 国際交流
 - ・IEA2006 Maastricht が 7 月 9 日～14 日にマーストリヒト(オランダ)で開催された。口頭発表約 1、100 件、ポスター発表約 250 件であった。次回 IEA 大会は 2009 年、北京で開催される。
 - ・日韓ジョイントシンポジウム
大阪において、6 月 10 日に第 47 回大会と同時開催、36 件の発表が行われた。
- (5) 国際活動関連記事
 - 第 42 巻 3 号 故秋田宗平教授の国際活動と IEA (杉山貞夫)
 - 第 42 巻 4 号 2005 年 IEA 理事会報告(富田豊)
 - 第 42 巻 5 号 IEA 2006(Maastricht、Netherland)参加報告(青木洋貴)
 - 第 42 巻 5 号 福祉と障害者の町:ドイツ・ベーター(細野直恒)

3-7. ISO/TC159国内対策委員会

{委員長:青木 和夫}

- (1) 委員会開催、国際会議出席状況
 - 1) 国内委員会:全体会議 4 回、分科会 37 回
 - 2) 国際会議出席状況:33 回の国際会議に延べ 86 名出席
- (2) 発行規格、投票
 - 1) 新 ISO 規格:10 件
 - ・「日用品の使いやすさー第 1 部:使用状況とユーザ特性」(ISO 28202-1:2006)
 - ・「日用品の使いやすさー第 2 部:評価方法」(ISO/TS 28202-2:2006)
 - ・「人体測定データベース作成のための一般的条件」(ISO 15535:2006)
 - ・「人間工学ー視覚表示装置を用いるオフィス作業ー第 110 部 対話の原則」(ISO 9241-110:2006)
 - ・「コントロールセンターの人間工学的設計ー第 7 部:コントロールセンターの評価原理」(ISO 11064-7:2006)
 - ・「表示器及び制御作動器の設計における人間工学必要条件ー第 3 部:制御作動器」(ISO 9355-3:2006)
 - ・「温熱環境の人間工学ー表面接触時の人体反応の評価法 第 1 部:高温表面」(ISO 13732-1:2006)
 - ・「温熱環境の人間工学ー第 2 部:等価温度の決定と評価」(ISO 14505-2:2006)
 - ・「温熱環境の人間工学ー車両の室内温熱環境 第 3 部:被験者による温熱快適性評価」(ISO 14505-3:2006)
 - ・「人間工学ーコンピュータマネキンとボディーテンプレートー第 2 部:コンピュータマネキンの機能の検定とディメンジョンの実証」(ISO 15536-2:2007)
 - 2) 投票:FDIS14 件、DIS 13 件、CD 1 件、見直し 6 件、NWIP 3 件、その他 4 件(DTR2、PAS2 件)

(3) 分科会活動

- | | | |
|-------------------------------------|--------------------------|------------|
| 1) SC1(指導原理) | 主査: 青木和夫 | |
| ・WG1+2(作業システム) | 主査: 柳堀朗子 | 分科会 1 回開催 |
| ・WG4(日用品のユーザビリティ) | 主査: 加藤象二郎 | 分科会 2 回開催 |
| 2) SC3(人体寸法と生体力学) | 主査: 横井孝志 | 分科会 2 回開催 |
| ・SG1(人体測定) | 主査: 横井孝志 | |
| ・SG2(姿勢・筋力) | 主査: 石川文武 | |
| 3) SC4(人間とシステムのインタラクション) | 主査: 中野義彦 | |
| ・WG1+2+3(ハードウェア・環境) | 主査: 中野義彦 | 分科会 13 回開催 |
| ・WG5+WG9+9241-20(ソフトウェア) | 主査: 山本栄 | 分科会 13 回開催 |
| ・W6(インタラクティブシステムの人間中心設計) | 主査: 黒須正明 | |
| ・WG8(コントロールセンター) | 主査: 藤田祐志 | |
| 4) SC5(物理的環境) | 主査: 栃原裕 | |
| ・WG1(温熱環境) | 主査: 栃原裕 | 分科会 4 回開催 |
| ・WG2(照明) | 主査: 金谷末子 | |
| ・WG3(音響と危険信号) | 主査: 桑野園子 | |
| ・WG4(環境評価) | 国内委員会を独立させず SC5/WG1 内に併設 | |
| ・WG5(特別な配慮を必要とする人々のための環境) | 主査: 倉片憲治 | |
| 5) TC159/WG2(特別な配慮を必要とする人々のための人間工学) | 主査: 佐川賢 | 分科会 1 回開催 |

3-8. 人間工学JIS委員会

{委員長: 矢頭 俊介}

(1) 平成 18 年度は、(財)日本規格協会の公募に下記 2 件の原案申し出を応募し、うち、1) が採択された。その原案に対して (財) 日本規格協会と日本人間工学会が原案作成の契約を行い、単年度 (平成 18 年 8 月開始、平成 19 年 7 月完了) の JIS 原案作成委員会を組織し、JIS 原案作成を行い、規格票の様式に照らした様式チェックを行っている。平成 19 年 6 月末までに (財) 日本規格協会に完成原案提出を行う予定である。

- 1) JIS Z8541-110 人間工学-視覚表示装置を用いるオフィス作業-第 110 部: 対話の原則
- 2) JIS Z8503-7 人間工学-コントロールセンターの設計-第 7 部: コントロールセンターの評価の原則

(2) これまで原案申し出を済ませながら、制定の運びに到っていなかった以下の 9 件について、消費生活技術専門委員会の儀を経て、平成 19 年度中にすべて制定される見通しがついた。

1. JIS Z 8501 人間工学-作業システム設計の原則
2. JIS Z 8503-6 人間工学-コントロールセンターの設計-第 6 部: コントロールセンターの環境
3. JIS Z 8511 人間工学-視覚表示装置を用いるオフィス作業-通則(追補 1)
4. JIS Z 8516 人間工学-視覚表示装置を用いるオフィス作業-作業環境に関する指針
5. JIS Z 8519 人間工学-視覚表示装置を用いるオフィス作業-非キーボード入力装置の要求事項
6. JIS Z 8523 人間工学-視覚表示装置を用いるオフィス作業-ユーザー向け案内
7. JIS Z 8531-1 人間工学-マルチメディアを用いるユーザインタフェースのソフトウェア-第 1 部: 設計原則及び枠組み
8. JIS Z 8531-2 人間工学-マルチメディアを用いるユーザインタフェースのソフトウェア-第 2 部: マルチメディアナビゲーション及び制御

9. JIS Z 8531-3 人間工学-マルチメディアを用いるユーザインタフェースのソフトウェア-
第3部:メディアの選択と組み合わせ

3-9. ユーザビリティ委員会

{委員長:中野 義彦}

- (1) 6年間にわたり活動した当委員会の使命を達成し、18年度で活動を収束する。
- (2) 平成18年度も学校のコンピュータ利用に関わるエルゴノミクス課題を解決するための情報収集を行った。
- (3) 電子ディスプレイ新技術をめぐる人間工学上のガイドライン関連課題を検討し JEITA 委員会と連携した。
- (4) ノートパソコン利用の人間工学ガイドライン改訂は保留した。
- (5) JENC/SC1/WG4、JENC/SC4 委員会及び他の関連ユーザビリティ検討団体と連携を図った。

3-10. 表彰委員会

{委員長:小町谷 朝生}

- (1) 委員会開催状況
下記の各賞の受賞者及び IEA への推薦者の選考に関して随時検討して、下記のことを行った。
- (2) 活動内容
 - 1) 大島正光賞について
・平成18年度総会において、平成18年大島正光賞の受賞者である牧下寛氏、松永勝也氏に対する授与式が行われた。
・平成19年大島正光賞について審議の結果、「受賞者なし」として理事会へ上申した。
 - 2) 日本人間工学会研究奨励賞について
・平成18年度総会において、平成18年研究奨励賞の受賞者である土井幸輝氏、小田原利江氏、林美恵子氏、藤本浩氏及び中川千鶴氏、鈴木浩明氏に対する授与式が行われた。
・平成19年研究奨励賞について審議の結果、2編を授賞論文として推薦した。
 - 3) その他
・故秋田宗平氏へ特別感謝状を贈呈した。

3-11. 安全衛生における人間工学要求事項委員会

{委員長:酒井 一博}

本委員会は、平成13年度より2期にわたる活動を行ってきたが、今期を以ってその活動を終了する。

これまでの活動の実績を見ると、安全衛生における人間工学要求事項ガイドラインを提言するまでには至らなかったが、第2期より安全工学会などの学協会等との合同研究会を継続的に開催し、情報交換や連携の強化を図るなど人間工学の領域を拡大発展することができた。以下にその事業内容を示す。

- (1) 全支部から推薦を受けた委員によって、委員会を断続的に開催した。産業別の安全衛生問題を討議することによって、安全衛生要求事項に関するガイドラインを提言することの必要性について討議を重ねた。
- (2) 安全衛生における人間工学要求事項ガイドラインについての骨子案(組織の安全度評価質問票および作業改善のための人間工学チェックリスト)を作成した。
- (3) 本委員会発足時から行った数回に渡るシンポジウムの開催により、安全衛生への取り組みに関する現状の問題点と、人間工学の対策の有効性について広く社会に問かけるとともに、その必要性を広く周知させることができた。
- (4) 社団法人日本人間工学推進委員会(斉藤進委員長)の協力のもと、安全工学会との共同研究会を継続的に開催し、日本人間工学会と安全工学会(元安全工学協会)との合同シンポジウム

(日本学術会議)の実施や、その活動成果として、両学会誌上において「日本人間工学会と安全工学会との共同研究の紹介」を公開することができた。

3-12. 第17期役員選挙管理委員会

{委員長:矢頭 佑介}

(1) 委員会日程

第17期(平成19～21年度)の役員選挙を以下の日程で実施した。

- ・平成18年10月10日(火)第1回委員会(通信)
選挙内規確認および有権者を確認
- ・平成18年10月28日(土)第2回委員会
評議員選挙投票用紙を発送
- ・平成18年12月2日(土)第3回委員会
評議員選挙の開票を行い評議員当選者へ就任諾否確認書を発送
- ・平成18年12月27日(水)第4回委員会
評議員内定者391名を確認、理事・監査選挙投票用紙を発送
- ・平成19年1月27日(土)第5回委員会
理事・監査選挙の開票、理事・監査当選者へ就任諾否確認書を発送
- ・平成19年2月15日(木)第6回委員会
理事・監査内定者を確認、会長・副会長選挙投票用紙を発送
- ・平成19年2月27日(金)第7回委員会
会長・副会長選挙の開票、会長・副会長当選者へ就任諾否確認書を発送
- ・平成19年3月7日(水)第8回委員会(通信)
会長・副会長内定者を確認
- ・平成19年3月12日(火)第129回理事会にて第17期役員選挙結果を報告

(2) 選挙結果

第17期役員選挙結果は、本総会資料(末頁参照)・第17期役員選挙報告(案)に掲載するところである。

評議員選挙、理事・監査選挙、会長・副会長選挙における投票状況は以下のとおりであった。

1) 評議員選挙の投票状況

支部	正会員数	評議員定数	投票数	投票率(%)
北海道	42	10	14	33.3
東北	63	15	15	23.8
関東	1,071	214	215	20.1
東海	171	36	63	36.8
関西	327	67	57	17.4
中四国	131	28	32	24.4
九州	93	21	17	18.3
総数	1,898	391	413	21.8

*無効票 3

2) 理事・監査選挙の投票状況

理事定数	評議員数	投票数	投票率(%)
19	391	229	58.6

*無効票 10

監査定数	評議員数	投票数	投票率(%)
2	391	229	58.6

*無効票 9

3) 会長・副会長選挙の投票状況

会長定数	理事・支部長数	投票数	投票率(%)
1	24	18	75

*無効票 2

副会長定数	理事・支部長数	投票数	投票率(%)
1	24	18	75

*無効票 2

(3) 選挙結果のホームページ掲載について

第 17 期役員選挙結果(内定者リストと定員、投票率などの投票状況)を本学会ホームページの選挙管理委員会のページに掲載する。なお票数は会員以外も見ることに配慮し掲載しない。

4. 支部活動

4-1. 北海道支部

{支部長:宮代 信夫}

(1) 会議

1) 支部役員会 平成 18 年 10 月 26 日・北海道工業大学

- ・平成 17 年度支部事業報告
- ・平成 17 年度決算報告並びに監査報告
- ・平成 18 年度予算案
- ・平成 18 年度支部事業計画案
- ・平成 19 年度支部大会および総会について

(2) 平成 18 年度支部大会および総会

1) 支部大会

日 時:平成 18 年 11 月 4 日(土)

会 場:北海道工業大学

大会長:三上行生(北海道工業大学教授)

シンポジウム:「道内ものづくり支援事業の現状とその課題—高齢社会を生き延びるために—」

座長:三上行生(北海道工業大学教授)

講演Ⅰ「道内ものづくり産業の現状と道工試の支援」

鴨田秀一(北海道立工業試験場)

講演Ⅱ「公設試による各種改善実践例の紹介」

畑沢賢一、飯田憲一(北海道立工業試験場)

講演Ⅲ「企業における改善の取り組み紹介」

蛭子日出男(北海道マイヒックス㈱)

講演Ⅳ「人材育成(改善のものの見方・やり方)と認定作業管理士の役割」

三上行生(北海道工業大学教授)

2) 支部総会議題

- ・平成 17 年度支部事業報告
- ・平成 17 年度決算報告並びに監査報告
- ・平成 18 年度予算案

- ・平成 18 年度支部事業計画
- ・平成 19 年度支部大会および総会について
- ・その他

4-2. 東北支部

{支部長:北村 正晴}

- (1) 支部主催講演会等
- (2) 支部役員会
 - 1) 日 時:平成 18 年 3 月 1 日(木)12:00~13:30
 - 2) 場 所:東北大学青葉記念会館 小会議室
 - 3) 議 題:支部増員計画、活性化方策などに関する意見交換、および新企画の支部交流会活動を媒介とした支部活性化方策に関する検討などを行った。
新年度第 1 回の研究交流会は、八戸大学(畑山俊輝教授)のご協力を得て、平成 19 年 5 月、青森県八戸市で開催する計画を策定した。
 - 4) 参加者:4 名
これ以外の役員会相当議事は、メール討論で進めている。
- (3) 支部ホームページ開設に関する検討
支部活動活性化策の一環として、支部ホームページ開設についての検討を進め試行版を立ち上げた。現在すでに支部主催行事等の案内、関連行事に関する情報提供に活用している。今後、さらに内容の充実を目指す、当面は現バージョンでの運用を行う。
- (4) その他
支部会員の関心、他分野との連携可能性などに関して、予備調査と連絡網の整備を進めた。

4-3. 関東支部

{支部長:堀江 良典}

- (1) 第 36 回関東支部大会
開催日:平成 18 年 12 月 2 日(土)~3 日(日) 会 場:早稲田大学
大会長:小松原明哲(早稲田大学教授)
特別講演:1 件 企画セッション:5 件 23 題 一般演題:74 題
- (2) 支部委員会
開催日:平成 18 年 12 月 2 日 会場:早稲田大学
- (3) 支部総会
開催日:平成 18 年 12 月 2 日 会場:早稲田大学
- (4) 卒業研究発表会
開催日:平成 18 年 12 月 2 日 会場:早稲田大学 演題数:41 題
- (5) 見学会
開催日:平成 19 年 3 月 13 日 会場(財)鉄道総合技術研究所 参加者:35 名
- (6) ニュースレターの発行:見学会案内(2 月)
- (7) 第 15 期(2007、2008、2009 年度)支部役員選挙結果
支部委員:青木通佳、青木和夫、阿久津正大、麻生勤、出浦淑枝、岩切一幸、岩永光一、大久保堯夫、尾崎博和、垣本由紀子、景山望、片寄隆正、加藤麻樹、岸田孝弥、北島洋樹、國澤尚子、窪田悟、鴻巣努、小松原明哲、斉藤進、三林洋介、塩澤友規、下村義弘、鈴木一弥、富田豊、鳥居塚崇、中林和彦、仲村洋之、芳賀繁、橋本修左、平柳要、保坂良資、堀江良典、堀野定雄、松田文子、水野基樹、持丸正明、谷島一嘉、山口喜久、吉村健志
(以上 40 名)
支部長:堀江良典

4-4. 東海支部

{支部長:福田 康明}

- (1) 平成 18 年度日本人間工学会東海支部総会の開催
開催日時:平成 19 年 3 月 26 日(月)16:00~16:30
場所:名城大学共通講義棟北 2 階 236 会議室
懇親会:18:00~20:00 名城大学校友会館「レストラン・ベル」
- (2) 講演会の開催
開催日時:平成 19 年 3 月 26 日(月)16:45~17:45
場所:名城大学共通講義棟北 2 階 236 室
講演:中京大学教授 神作博氏
演題:日本における人間工学の原点-私と人間工学-
- (3) 平成 18 年度日本人間工学会東海支部研究大会の開催
開催日時:平成 18 年 10 月 28 日(土) 9:30~18:00
開催場所:アクト津
大会長:三重大学教授 水谷一樹氏
発表演題数:特別講演 1 件、一般演題:40 件
特別講演 三重大学教授 増田智恵
演題「3 時元ファクトリーブティックの開発」
参加者:94 名
懇親会参加者:33 名
- (4) 東海支部役員選挙の実施と開票結果
支部長:横森求
役員:渥美文治、池浦良淳、榎原毅、大橋信夫、太田壽江、加藤隆康、加藤象二郎、斉藤真、高松衛、
富田明美、中嶋芳雄、永田雅典、福田康明、宮尾克、向井希宏、横山清子
監査:神作博、高田和之 (五十音順)
- (5) 平成 19 年度東海支部研究大会について
平成 19 年度支部研究発表大会は、榎原毅先生を大会長として名古屋市立大学医学部で開催
することを決定した。開催日は未定。
- (6) 日本人間工学会第 48 回大会の第 1 回実行委員会を名城大学にて開催し、大会長には福田康明
(名城大学)、実行委員長には斉藤真(三重県立看護大学)および実行委員 28 名を選出すると
共に、開催準備の打ち合わせを行なった。
- (7) 役員会開催(6 回開催)

4-5. 関西支部

{支部長:堀井 健}

- (1) 平成 18 年 6 月 9 日~11 日 日本人間工学会第 47 回全国大会(大阪市立大学杉本キャンパス)
(日本人間工学会関西支部基金より 30 万円の支援を行った。)
6 月 9 日:公開企画:新しい人間工学の世界を探る
(基調講演、大会企画シンポジウム、若手の企画)・(理事会)
10~11 日:シンポジウム 5 件、一般演題 201 件、テーマ(口頭 158、ポスター 43)、
日韓共同シンポジウム 36 件 テーマ(日本 17・韓国 19)、企業・研究室紹介 14 件・企業展示 17
社
参加人数 大会:694 名(内訳:正会員 301 準会員 56 非会員 99 学生非会員 151 賛助会員 41
招待者 13 韓国 24 不明 9)
- (2) 平成 18 年 7 月 21 日 第 1 回企画委員会(関西大学工学部システムマネジメント工学科)

- (3)平成 18 年 9 月 10 日 2007 年度役員改選の候補者募集案内送付
- (4)平成 18 年 10 月 24 日 第 2 回 E-mail 企画委員会
- (5)平成 18 年 11 月 10 日 平成 18 年度見学会(関西電力(株)「原子力安全システム研究所」、
(関西電力(株)「美浜原子力 PR センター」)
参加人員 16 名 見学内容、
「美浜原子力 PR センター」実験施設、ヒューマンラボ見学
①「講演」木村逸郎所長「原子力利用の安全と安心」
②「講演」ヒューマンファクタープロジェクト
「原子力発電事業に対する安心感の醸成には何が必要か」
③「ヒューマンファクター研究の紹介」
「美浜原子力 PR センター」PR ビデオ、原子炉模型展示物の見学
- (6)平成 18 年 12 月 2 日 平成 18 年支部大会(武庫川女子大学中央キャンパス L1 号館)
特別講演「居場所機械-自転車とケータイ」(藤本憲一 武庫川女子大学)
企画セッション「船と人」(才木常正 兵庫県立工業技術センター)、
一般セッション「ユーザビリティ」「操作」「操作・作業」「支援」「心理」「視機能 1」「視機能 2」
「視機能 3」「聴覚 1」「聴覚 2」「温熱生理」「身体」 発表 46 件
- (7)平成 18 年 12 月 2 日 第 1 回評議員会・役員会合同会議(武庫川女子大学中央キャンパス)
- (8)平成 18 年 12 月 7 日 2007 年度役員投票用紙送付(締切 2007 年 1 月末)
- (9)平成 19 年 2 月 1 日 (2 月 15 日締切)E メール評議員会(平成 18 年度支部大会での優秀発表賞選考)
- (10)平成 19 年 2 月 10 日 選挙管理委員会(2007 年度役員開票)
- (11)平成 19 年 3 月 26 日 第 2 回評議員会・役員会合同会議、総会、優秀発表賞授賞式、講演会、
懇親会 場 所: 関西大学 100 周年記念会館
優秀発表賞受賞者
安達悠子(大阪大学大学院人間科学研究科)
「看護場面における違反事例の収集とその内容分析-心理的要因との関連-」
田中邦彦(大阪市立大学大学院生活科学研究科)
「驚愕性瞬目反射の先行刺激効果におよぼす背景要因の検討」
井戸千沙(関西大学工学部システムマネジメント工学科)
「運動反転時に発現する Catch-Up Saccade の基本特性」

4-6. 中国・四国支部

{支部長:辻 敏夫}

- (1)第 39 回日本人間工学会中国・四国支部大会
開催日:平成 17 年 12 月 3 日(土) 場 所:広島大学東広島キャンパス
大会長:辻敏夫(広島大学)
特別講演:「超速ハイパーヒューマン技術が開く新世界-人間の能力を超えた世界をのぞいて
みよう-」大阪大学大学院工学研究科 金子真先生
一般講演:24 件
大会参加人数:101 名
- (2)第 40 回日本人間工学会中国・四国支部総会
・開催日:平成 19 年 12 月 1 日(土) ・場 所:香川大学工学部
- (3)支部講演会(2 回)
・第 1 回:2006 年 9 月 22 日(金) 会 場:広島大学
講 演:「ヒトの触感覚情報処理機構」
講 師:静岡理工科大学 理工学部 宮岡徹先生
・第 2 回:2007 年 2 月 8 日(木) 会 場:広島大学

講演:「筋肉を規範としたセルラーアクチュエータの開発」

講師:奈良先端科学技術大学院大学 上田淳先生

(4) 理事会(3回)

第1回:平成17年4月3日(月)、会場:広島大学

第2回:平成17年11月25日(土)、会場:広島大学

第3回:平成17年3月22日(木)、会場:広島大学

(5) 2005年度支部表彰

題目「作業負担軽減のための水耕ネギ栽培システムの開発」

発表者:橋本晃司、岡野仁、中村幸司、横山詔常、古川昇、越智資泰、今井俊治、
岡部享(広島県立東部工業技術センター)

題目「非接触筋電計を用いた電動車椅子の制御」

発表者:谷口早矢佳、柴建次、辻敏夫(広島大学)

4-7. 九州支部

{支部長:長谷川 徹也}

(1) 第27支部評議員会

1) 月 日:平成18年12月16日

2) 会 場:近畿大学産業理工学部(飯塚市)

3) 議 題・平成18年度活動報告と決算

・平成19年度活動計画と予算案

・平成20年度第28回大会について

・その他

(2) 第27回支部総会

1) 月 日:平成18年12月16日

2) 会 場:近畿大学産業理工学部(飯塚市)

3) 議 題・平成18年度活動報告と決算

・平成19年度活動計画と予算案

・平成20年度第28回大会について

・その他

(3) 第27回九州支部大会

1) 月 日:平成18年12月16日

2) 会 場:九近畿大学産業理工学部(飯塚市)

3) 大会長:長谷川徹也(近畿大学)

4) 研究発表:4セッション、14演題

特別講演「子供と玩具の関係をデザインする-レゴブロックのデザイン開発-」(楠林拓先生
(近畿大学))

5) 「九州支部第27回大会講演集(九州人間工学 第27号)」の作成

(4) 「九州人間工学 第27号」の発送

5. 研究部会活動

5-1. 医療安全研究部会

{部会長:土屋 文人}

(1) 活動目的

昨今多発している医療事故の多くは、医薬品や医療用具と人間との間のインターフェースあるいは人間同士におけるコミュニケーションに問題があると考えられる。臨床で発生した事故あるいはヒヤリハット事例の報告が外部から参照できるようになった今、その問題解決のために人間工学的観点から医療安全を図る方策を検討することによって、医療安全に寄与することを目的とする。

(2)活動内容及び成果

本年度はホームページの開設を行ったが、昨年度実施したような製薬企業を対象とした研修会等は開催できなかった。また、工学系学会の横断的組織である横幹連合に医療安全研究部会が中心となって医薬品インターフェース調査研究会の設置を申請し、承認を受けた。これにより医療安全研究部会は来年度以降、医薬品関連については横幹連合との強調を図りつつ活動を行うとともに、医療機器のインターフェースや労働環境問題も含めて、総合的に医療安全を図るための研究活動を行うこととなる。

また、本年度は厚生労働省において「医療安全管理者の業務指針および養成のための研修プログラム作成指針」の検討WGが設置され、その報告書には、医療安全管理者の研修において習得すべき基本事項に「人間工学に関する知識」が明記されたことも、本研究部会の今までの活動の成果といえよう。

5-2. 衣服人間工学部会

{部会長:間壁 治子}

(1)活動目的

当部会は、平成14年度より「人間と衣服との関係の評価について」をテーマに活動を行っている。中で「アパレル産業における人体計測データの活用法」に絞って活動した。

(2)活動内容

平成18年度は、役員会を3回、例会3回を開催した。活動内容と演題は以下の通りである。

1)第1回例会(パネルディスカッション)

開催日:平成18年5月19日 場所:文化女子大学

テーマ:「アパレル産業における人体計測データの活用法」

パネリスト:秋山和雄氏(㈱オンワード 榎山 生産本部技術開発室長)

土田こづえ氏(㈱東京ソワール)

参加者:部会長以下35名

2)第2回例会(パネルディスカッション)

開催日:平成18年9月1日 場所:文化女子大学

テーマ:「紳士服産業における人体計測データの活用法」

パネリスト:湯川典浩氏(㈱オンワード 榎山 メンズビジネスウエア事業本部メンズ技術課課長)

浅見徹氏(㈱レナウン ダーバン事業本部 商品開発担当課長)

福岡浩一郎氏(㈱レナウン ダーバン事業本部 商品開発チーフパタンナー)

参加者:部会長以下20名

3)第3回例会(見学会)

開催日:平成19年2月28日

場所:トヨタL&Fカスタマーズセンター(千葉県市川市)

ソーイングアサヒ(㈱)(千葉県旭市)

参加者:部会長以下30名

(3)成果

- ・アパレル産業(レディース・メンズについて)でのJISサイズの活用事例を聞くことが出来、企業での実情を認識することができた。
- ・高級婦人服の縫製工場の見学では、丁寧な作業がなされており、整備された環境で製品が作られている現状を把握することができた。

(4) 問題点

昨年も問題点として挙げたが、産学共同で、より衣服人間工学発展のため、さらに議論・検討を進める必要がある。

現在進行している計測データの取り扱い方、製品への活用方法について部会としても提言していかなければならない。若手人材の育成も急務と考える。

(5) 展望

・個人では見学が難しい工場など、若手の育成も念頭におき、参加型の例会の実施も行っていく予定。

5-3. 航空人間工学部会

{部会長:垣本 由紀子}

(1) テーマ

航空人間工学に関する知識の普及、情報の共有化

(2) 手段・方法ならびに成果

1) 例会

第 87 回および第 88 回例会を東京代々木のオリンピック記念青少年総合センターで開催し、例会の参加者数はそれぞれ合計 83 名、118 名が参加し、活発な議論がもたれた。各例会の概要は以下のとおりである。

・第 87 回例会

日 時:平成 18 年 7 月 13 日 13:30~17:00

場 所:オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)

テーマ:「過去の航空事故事例に学ぶ」

講 演:

(1) 南ドイツ事故が残した教訓

国土交通省 東京空港事務所管制保安部

航空管制官 駒井繁利氏

(2) ヘリオス航空事故から学ぶものは何か

(株)日本航空インターナショナル

B747-400 運航乗員部 部長付機長 本江彰氏

(3) シンガポール機、閉鎖された滑走路から離陸、衝突炎上

全日本空輸(株) グループ安全推進部

テクニカルスタッフ B777 機長 川島正二氏

・第 88 回例会

日 時:平成 19 年 2 月 23 日 13:30~17:00

場 所:オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)

テーマ:「Safety Management System の実践」

講 演:

(1) 航空における Safety Management System

(財)航空輸送技術研究センター 常務理事 十亀洋氏

(2) テキストマイニング技術を利用した Safety Management

(株)日本航空インターナショナル 安全推進本部

安全調査・研究グループ 調査役 767 機長 佐々木敏宏氏

(3) 「安全性の向上へ向けて」 “ADO の FOQA プログラム導入について”

北海道国際航空(株) 安全評価室監査室長 秋山正秀氏

(4) ヒューマンエラー削減への挑戦

(株)日本航空インターナショナル 品質保証部 品質マネジメント室

ヒューマンファクターグループマネージャー 渋江尚夫氏

2) 委員会

本部会の運営に係る方針を決定するために、今年度は 2 回委員会を開催した。委員会の概要は以下のとおりである

・第 43 回委員会

日 時:平成 18 年 7 月 13 日 10:00~11:00

場 所:オリンピック記念青少年総合センター(東京・代々木)

議案:

- (1) 第 87 回例会の概要について
- (2) 新委員の選任
- (3) 第 88 回例会のテーマについて
- (4) 日本人間工学会部会活動費の送金について

・第 44 回委員会

日 時:平成 19 年 3 月 27 日 14:00~15:30

場 所:財団法人航空輸送技術研究センター事務所会議室

議案:

- (1) 平成 18 年度収支報告
- (2) 平成 18 年度活動報告
- (3) 平成 19 年度活動計画
- (4) 部会長の再任
- (5) 委員の退任
- (6) 第 89 回例会のテーマについて

その他、委員会および例会の活動を補佐するために、平成 18 年度は 4 回幹事会を開催した。

3) ホームページの運営

インターネットホームページを運営することにより、非会員も含めた多くの者に対し、航空安全への理解・関心を深めさせることができた。また、例会申し込みをホームページから実施できるよう改善し、会員の利便性を高めた。さらにホームページに過去 1 年間に開催された例会の講演内容を掲載し、例会に出席できなかった会員に対する支援を行った。

4) 例会資料の電子ファイル化の継続

第 1 回例会(1970 年 3 月開催)~第 88 回例会(2007 年 2 月開催)までの資料を CD-ROM に記録し、これを継続して財団法人日本航空協会の運営する航空図書館に寄贈することにより、一般の供覧に提供した。

注:一部例会資料の欠落あり

5) 展望

活動を継続することにより、当部会の目標である、航空人間工学の発展、航空安全の推進に寄与できるものとする。

5-4. アーゴデザイン部会

{部会長:堀野 定雄}

(1) 活動テーマ:「ユビキタス環境でのユーザビリティ」

(2) 部会運営と主な活動内容

部会員 97 名(平成 19 年 3 月 31 日現在)

平成 18 年度はシンポジウム 2 回、コンセプト事例発表会 1 回、見学会 1 回、合宿研究会 1 回、幹事会 7 回、総会 1 回、研究会準備委員会 2 回を開催。ユビキタス・UDWG 活動、幹事選出選挙実施。

1) 独自ドメインによるアーゴデザイン部会ホームページ運用、部会員メーリングネットワーク運用、幹事会メーリングネットワーク運用

2) シンポジウム開催(平成 18 年 6 月 11 日)第 47 回日本人間工学会全国大会於:大阪市立大学 出

- 席者:80名
 テーマ:「ユビキタス+ユニバーサルデザイン方法論の実践」司会:新家敦(島津ビジネスシステムズ)
- 講演 「思い出に残るキャンパスライフ提案に至るまで」伊藤潤(ソニー)
 「ユビキタス技術によるキャンパスライフ支援の考察」吉川嘉修(富士通)
 「ユビキタス時代における新しいキャンパスライフの提案」井上敦夫(小樽商科大学)
- 3) コンセプト事例発表会(平成18年8月4日) 於:東京都労働相談情報センター(大崎) 出席者:72名
 特別講演『ケータイサービスの進化から鑑みる、ユビキタス社会の実現へのアーゴデザインの課題』木暮祐一(携帯電話研究家/徳島大学大学院)、部会員による12件の事例発表:
 「CIF(Common Industry Format)に基づく定量的ユーザビリティ品質評価の実践」五十嵐友子、尾上晏義(インターソフト)、「消費者行動論とデザイン」酒井正明(ユーアイデザイン研究所)、「ユビキタス的な社会の展開への考察、東京都のオープンユニバーシティの活用に関連して」大津慶子(首都大学東京)、「エレベータ戸開閉ボタンの判別性向上機能の開発事例」三井一志(フジテック)、「知的障害者における巧緻性について-眼と両手の協応性から考える-」岡耕平(大阪大学)、「ユビキタス時代に向けた新たなユーザーインターフェース・デザイン提案」黒沢悠、上田義弘(富士通)、「UD視点から見たバス車内事故防止に関する人間工学研究」堀野定雄、森みどり(神奈川大学)、「ユビキタス時代のためのUCD手法-スマイルエクスペリエンス」山崎和彦、村中直文(日本IBM)、「ユビキタス時代のためのUCD手法-アウトサイドイン手法」村中直文、山崎和彦(日本IBM)、「観察工学の考え方と方法」山岡俊樹(和歌山大学)、「in-situ人間工学の継続観察への応用」新家敦(島津ビジネスシステムズ)、「医療器における商品仕様の問題点抽出と改善点検討」木田健一(テルモ)、
- 4) シンポジウム開催(平成18年12月2日) 日本人間工学会第36回関東支部大会 於:早稲田大学理工学部
 テーマ:「ユビキタス時代のユニバーサルデザイン」発表者 3名によるパネル討論 出席者:80名
 講演 ・「家電ネットワークを用いた生活異変の検知技術」松岡克典(産業技術総合研究所)
 ・「ユビキタス時代の観察手法」新家敦(島津ビジネスシステムズ)
 ・「ユビキタス3層モデルの人間中心設計」森博彦(武蔵工業大学)
 ・「ユビキタス時代のコンセプト開発手法実践事例」上田義弘(富士通)
 ・「IAUDにおけるユニヴァーサルデザインマトリックスの研究」大室誠(セイコーエプソン)
 ・「UDマトリックスの展開 -ユビキタス時代を考慮して-」山崎和彦(日本IBM)
- 5) 見学会(平成18年1月22日) ミサワパーク(高井戸) 参加者:20名
 6) 合宿研究会 In SHYOUNAN(平成18年3月9日~10日) 於:湘南国際村センター出席者:35名
 テーマ:「ユビキタス・ユニバーサルデザインマトリックスを目指して」3グループによる討論
 「フォトシナリオ、フォトエッセイの実践から」森博彦(武蔵工業大学)、上田義弘(富士通)、「フォトシナリオからのペルソナの導出」山崎和彦(日本IBM)、「ワークショップの進め方説明(ペルソナの導出・インタラクション要件の抽出)」早川誠二(リコー)
- 7) 平成18年度部会総会(平成18年3月10日) 於:湘南国際村センター 活動報告及び会計報告
- (3) 今年度も情報社会人間工学研究部会との共催により行事を運営した。
 (4) 成果:ユビキタス環境でのユニバーサルデザインを踏まえたサービスからインタラクションへのデザイン方法論の実践を試みる事ができた。ユビキタスなユニバーサルデザインの方法論の提案段階にたどった。
 (5) 問題点:ユビキタス環境を活用したユニバーサルデザイン方法論についてより具体的な議論の場が必要となった。
 (6) 展望:部会テーマ「ユニバーサルデザインのためのユビキタスデザイン方法論」の具体的な提案段階となった。

5-5. 感性情報処理・官能評価部会

{部会長:市原 茂}

(1) 活動目的

当部会の活動目的は、人間の感性情報処理、およびそれらを用いた官能評価に関わる広範囲の研究領域に携わる研究者が、相互に刺激を与えあう場を作ることである。

(2) 活動内容

- 1) 第1回講演会「知覚の初期発達」(平成18年7月8日 文化女子大学)
 - ・大塚由美子(中央大学大学院文学研究科)「乳児における形態知覚と運動知覚の相互作用」
 - ・白井述(中央大学大学院文学研究科)「相対運動知覚の初期発達」
- 2) 第2回講演会「鉄道利用者のための人間工学と官能評価」
(平成18年12月16日 文化女子大学:土木学地下空間研究委員会心理小委員会と共催)
 - ・鈴木浩明(鉄道総合技術研究所)「鉄道における人間工学と官能評価」
 - ・斎藤綾乃(鉄道総合技術研究所)「列車内設備のユニバーサルデザイン評価」
 - ・水上直樹(鉄道総合技術研究所)「視覚障害者誘導用ブロックの敷設方法」
 - ・藤波浩平(鉄道総合技術研究所)「迷惑行為に対する利用者の意識と行動」
- 3) 第15回システム大会(平成19年3月16日～18日 八王子セミナーハウス)
「感性・官能セッション」(平成19年3月17日)
 - ・三好義浩(兵庫教育大学)「キャラクターデザインの評価」
 - ・大島研介(首都大学東京)「視覚触覚間不一致事態における視覚の影響」
 - ・椋代弘(岡山県工業技術センター)「車椅子座面快適性評価」
 - ・梶谷哲也(文化女子大学)「物体の提示位置が物体の大きさ知覚に及ぼす効果」
 - ・櫻井優香理(都立保健科学大学)「月経前症候群および月経困難症に対するアロマセラピーの効果」
 - ・千田明(首都大学東京)「仮現運動の対応問題における運動の型の影響」
- 4) 各行事開催や部会にあたって幹事会を開催した。
 - ・第1回幹事会(平成18年5月10日文化女子大学):平成18年度の具体的活動計画、講演会について
 - ・第2回幹事会(平成18年7月8日文化女子大学):講演会について
 - ・第3回幹事会(平成18年11月10日文化女子大学):講演会について
 - ・第4回幹事会(平成18年12月16日文化女子大学):講演会、システム大会について
 - ・第5回幹事会(平成19年3月16日八王子セミナーハウス):システム大会について
 - ・第6回幹事会(平成19年3月18日八王子セミナーハウス):次回システム大会開催について

(3) 成果

基礎的な知覚研究を中心とする講演会と官能評価の応用研究を中心とする講演会の2つの講演会を行ったが、それぞれの講演会も充実した内容で、活発な質疑応答がなされた。前者は、若手の新進気鋭の研究者たちによる乳児の知覚発達についての研究の紹介であった。講演者の最近の実験研究が詳細に紹介され、聴衆のよい刺激となった。後者は、鉄道総合技術研究所の一线の研究者たちによる研究紹介がなされた。鉄道における人間工学研究の現状と課題が概観できる非常に内容の濃いものであり、今後の官能評価研究のひとつの方向を示すものといえた。後者は、土木学会地下空間研究委員会心理小委員会との共催であったが、他領域の研究者とも交流を深めることができた。システム大会では、官能評価における最新の諸研究が紹介され、これも充実した内容であった。

5-6. 看護人間工学部会

{部会長:阿曾 洋子}

(1)活動目的

看護人間工学の教育方略に関する研究ならびに人間工学に基づいた看護人間工学の独自性を明確に打ち出していくための研究成果を積み上げることを目的としている。

(2)活動内容

1)第14回看護人間工学部会総会・公開研究会・講演会開催

2006年8月19日(土)に栃木県文化センターにおいて、自治医科大学看護学部の大久保祐子助教授が主催し、第14回看護人間工学部会総会・公開研究会・講演会を行った。

総会では、昨年に引き続き、看護領域の研究成果共有という点から、日本人間工学会会員に看護人間工学部会への入会を呼びかける方針についての確認を行った。

講演は、高村寿子先生(自治医科大学看護学部教授)に「セルフエフィカシーを高めて生き生きと活動するには」を依頼し、実施した。

公開研究会では、下記の演題6題が発表された。

- ・代謝循環器系外来患者の日常動作評価への検討
- ・高齢者の手すり使用効果に関する一実験
- ・体型の違いからみた頭部挙上30度時における仙骨部周囲圧迫状況
- ・清拭タオルの水分が体表温度・気持ちよさにおよぼす影響について
-タオルの含水量と水分の拭きとりの違いから-
- ・蒸しタオル清拭と石けん清拭の安楽性の比較-主観調査と皮膚温の分析から-
- ・メディカルネットワークとユビキタスシステム

2)第15回システム連合大会参加

2007年3月16日(金)~3月18日(日)に八王子セミナーハウスで開催された、第15回システム連合大会に参加した。17日(土)の感性官能評価セッションでは以下の1題が発表された。

- ・月経前症候群および月経困難症に対するアロマセラピーの効果。また、18日(日)の看護セッションでは以下の7題が発表された。
- ・高齢者の体型の違いからみた仙骨部及び臀裂部血流量の比較
- ・仰臥位からシムス位への体位変換による消化管活動の実態
- ・分娩遷延の予測要因として活用する骨盤外計測について
- ・酸素測定法による健康な女子学生の唾液中 β -エンドルフィン値
- ・ファジイ概念を考慮したコンパートメントシステム
- ・健康な高齢者におけるベッド上坐位姿勢の角度の違いによる自律神経活動の比較
- ・代謝循環系外来患者の心機能からの動作解析への検討-動作不安の実態を調査して-

3)看護人間工学研究誌の発行

看護人間工学研究誌第7巻を発行(平成19年3月)し、部会員に送付した。

(3)研究成果の発信と会員の獲得

第26回日本看護科学学会学術集会においては「移動動作のエビデンス」、日本看護技術学会第5回学術集会においては「人間工学とケアをつなぐ-人間工学の視点からケアを評価する」との題目で部会メンバーによるセッションを実施し、看護人間工学領域における研究成果を広く発信した。

(4)今後の課題

部会情報の発信という点から、部会のホームページにおいて研究成果のabstractに英語版を設けることを目標として取り組んできたが、十分に行うことが出来なかった。次年度も引き続き取り組んでいくこととする。

また、部会員の本会への入会促進についても引き続き取り組んでいくこととする。

5-7. 海上人間工学研究部会

{部会長:大橋 信夫}

(1)活動目的

主に、第一次産業の労働に関するテーマについて検討を行なった。将来にわたって第一次産業に従事する人がより快適で、働きやすい労働環境を実現するために必要な課題や検討方法について明らかにすることを目的としている。

(2)活動内容及び成果

1)シンポジウムの企画・実施

日本人間工学会第47回定期大会(平成18年6月10日、大阪市立大学)において、「国内の第一次産業の労働について-労働の特徴と作業の安全性-」と題してシンポジウムを企画・実施し、学会員への情報提供を行なった。すなわち第一次産業の労働における共通課題を明らかにすることを目的に、漁業、林業、農業のそれぞれの研究者から、就業者の動向、就労形態・条件、労働環境や労働条件の特徴、労働災害の現状や作業の安全確保等の資料や具体的な事例が提示され、これをもとに活発な意見交換を行なった。

2)資料収集

下関西方海域を漁場とする漁業を対象に、漁業生産技術や漁業を行なう上で必要な漁業従事者の技能を対象とした資料収集を行った。対象漁業は小型底曳網と建網漁業で、漁船や網の構造、操業内容の記録や操業の実態に関する聞き取り調査を行った。

3)研究会開催

研究部会を開催し、上記シンポジウムで議論された内容等の確認と、今後の活動について意見交換などを行った。

4)部会ホームページの更新

部会の活動報告や情報交換の場として、ホームページの内容を更新し、学会員への情報提供を行なった。

(3)問題点及び展望

農業、林業、漁業の労働をテーマとした議論や情報交換をより活発に行い、部会員や関係者間で様々な視点から部会活動を行っていく必要がある。さらに第一次産業の労働環境や従事者の技能等、第一次産業を対象とした“学”の連携をさらに深め、今後の労働の在り方について明らかにしていきたい。

5-8. ジェロンテクノロジー研究部会

{部会長:長町 三生}

(1)活動目的

本研究部会は、すでに超高齢社会といわれている、日本の高齢化時代の課題を人間工学や老年医学の視点から高齢者のQOLをいかに高めるかを目標に、設立された部会である。さまざまなテクノロジーに囲まれて生活している、現代の高齢者にとってのさまざまな問題を明らかにし、その原因を考え、対策を明らかにし、実際の改善に結実することを目的としている。

年々増加する、人間工学での高齢者関連の研究を集積し、より活発にするための成果発表と議論の場を作ることを目的として、毎年研究発表大会を行なってきた。本年度は、5年目に当たり、第5回の研究大会を行った。

(2)活動内容

2007年3月26日に、広島国際大学にて、第5回のジェロンテクノロジー研究発表大会を開催した。

内容は以下の通り。

13:00～ 部会長あいさつ(長町三生先生)

13:05～13:55 講演 三洋電機株式会社 研究開発本部 ヒューマンエコロジー研究所 藤原義久博士

商品開発における感性工学とその応用例

感性インターフェースを活用した家電製品の開発事例

14:00～16:10 研究発表(発表20分、質疑5分)

- ・長町三生(九州大学ユーザーサイエンス機構)
感性工学・人間工学とGerontechnologyとの関連性について
- ・石原恵子(広島国際大学)
現金振込操作を行う銀行ATMのむずかしさ
- ・神邊篤史、松原行宏(広島市立大学)
力覚フィードバックをもつボール投げによる上肢運動リハビリテーション支援システム
- ・木下祐介、北川健太、井上勝雄(広島国際大学)
ラフ集合を用いたユーザビリティ評価手法の提案
- ・石原茂和(広島国際大学)
車イス推進時の頭部振動の計測—なぜ車イスで街にでると気持ち悪くなるのか

(3) 成果と展望

研究発表大会も5回目を数えました。その間、部会メンバーによる高齢者対策・対応の人間工学研究も数多く人間工学会大会で発表されるようになり、“人間工学”、“Gerontechnology”を始めとするジャーナルに掲載されるようになりました。部会のメンバーの多くが運営にかかわった2005年の、ジェロンテクノロジー国際会議も成功し、ジェロンテクノロジーの方法論も十分広まり、また国際レベルの研究がひろく行われるようになったのは喜ばしいことです。

以上のことから、部会の当初の目的は十分達成されたと考えます。国際会議を含む5回の研究発表大会と人間工学への寄与を成果として、ひとまずジェロンテクノロジー部会の活動を終了することにいたしました。

5-9. 口と健康部会

{部会長:山本 宏治}

(1) 第22回研究発表大会

開催日:平成18年9月2日(土)

場 所:愛知学院大学歯学部附属病院7階講義室1(名古屋市千種区末盛通2-11)

大会長:愛知学院大学歯学部歯科補綴学第三講座 伊藤裕教授

1) 一般講演

1. 光ファイバーを用いた口腔内写真撮影用照明装置の開発
原田崇、杉浦静夫、内嶋栄一、渡辺準逸(愛知学院大学歯学部写真室、杉浦研究所)
2. メッキを廃止した口腔内撮影用ミラーの開発
原田崇(愛知学院大学歯学部写真室)
3. CTおよびサージカルガイドを使用した歯科インプラント治療のシステム化
長谷川雄一、村上弘、竹内一夫、松村晋吾、服部正巳、大崎千秋、川澄勝久、相村明彦
(愛知学院大学歯学部歯科補綴学第二講座、附属病院歯科技工部)
4. 歯周病検査データの電子入出力による効率化
-日本歯周病学会 歯周病専門医 新規申請用フォーム-
伊藤正満、稲垣幸司、野口俊英、坂上竜資、漆原譲治、横田誠
愛知学院大学歯学部歯周病学講座、日本歯周病学会 ホームページ委員会、専門医審議会、
福岡歯科大学口腔治療学講座歯周病学分野、(株)ジーシーデータランド、
九州歯科大学歯学部口腔治療学講座歯周病態制御再建学分野⁶
5. 根管拡大形成操作解析装置の開発
庭野和明、子田晃一、興地隆史
新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻う蝕学分野
6. 歯科診療姿勢自動評価システムへの自動警報装置の追加
子田晃一、庭野和明(新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻う蝕学分野)
7. バリアフリーをめざした車椅子患者と一般患者の両用型歯科用ユニット
玉澤佳純、渡辺誠、玉澤かほる、岩松正明、湯本伸夫

- 東北大学歯学部附属病院感染予防対策治療部
8. カスタムメイドマウスピースに関する実態調査
-高校野球投手に対するアンケート調査-
竹内宏二、若城健介、山本宏治(朝日大学歯学部口腔機能修復学講座補綴学分野)
9. MI 修復実習用齶蝕付き人工歯の試作・検討
斎藤隆史、川上智史
北海道医医療大学歯学部歯科保存学第二講座、
北海道医療大学個性差医療科学センター
- 2) 特別講演
「安全・安心な歯科治療を求めて」
渡辺誠教授(東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野)
- 3) その他
歯科用身障者対応チェア・ユニット見学、(株)GC 名古屋営業所
- (2) 幹事会の開催
第 59 回 平成 18 年 7 月 28 日(金)名鉄グランドホテル
第 60 回 平成 18 年 9 月 1 日(金)名古屋ガーデンパレス
- (3) 第 22 回研究発表大会講演論文集発行

5-10. 情報社会人間工学研究部会

{部会長: 森 博彦}

- (1) 平成 18 年度活動テーマ
平成 18 年度は下記の二つをテーマとして掲げ、活動を行ってきた。
・ユビキタス社会とポストユビキタス社会における情報サービスの人間中心設計
・情報社会のサービス創出のためのシナリオ法と要求分析手法
- (2) 活動内容(手段・方法)
- 1) 第 42 回全国大会におけるシンポジウムの開催
平成 18 年 6 月 11 日に開催された第 42 回全国大会において、アーゴデザイン部会と共催でシンポジウムを開催した。内容は下記の通りである。
シンポジウムテーマ:「ユビキタス+ユニバーサルデザイン方法論の実践」
司会: 郷健太郎(山梨大学大学院)
講演:
「思い出に残るキャンパスライフ提案に至るまで」伊藤潤(ソニークリエイティブセンター)
「ユビキタス技術によるキャンパスライフ支援の考察」吉川嘉修(和歌山大学大学院)
「ユビキタス時代における新しいキャンパスライフの提案—フォトシナリオ法によるアプローチ—」
井上敦夫(小樽商科大学大学院)
- 2) SICE-ICCAS 2006 におけるオーガナイズドセッションの企画
平成 18 年 10 月 18~21 日に釜山で開催された SICE-ICCAS 2006 でオーガナイズドセッションを企画し、開催した。
セッションテーマ:「Human-Centric Information Services in Ubiquitous and Post-ubiquitous Society」
司会: Hirohioko Mori (Musashi Institute of Technology)
講演:
“Designing Familyware” Kentaro Go (University of Yamanashi)
“Unconscious transmission of human feelings” Mitsuhiko Karashima, Yuko Ishibashi (Tokai University)
“An experiment for work environment design at the time of the personal information

handling in public space” Shigeyoshi IIZUKA, Katsuhiko Ogawa (NTT Cyber Solutions Laboratories)

“A study of the websites for disasters in consideration of the time passage after the disaster and the characteristics of the area” Tamae Imafuku, Sakae Yamamoto (Tokyo University of Science)

“Tradition of craftsmanship through computer-augmented tools” Yuka Jinbo, Takahiro Muta, Hirohiko Mori (Musashi Institute of Technology)

“User interface concepts for post ubiquitous computing” Naotake Hirasawa, Naoto Aizawa, Atsuo Inoue, Tomonori Shibagaki (Otaru University of Commerce), Hideaki Kasai (NEC Software Hokkaido, Ltd)

3) 計測自動制御学会システム・情報部門学術講演会 2006 におけるオーガナイズドセッションの企画

平成 18 年 11 月 28～30 日に開催された計測自動制御学会において、オーガナイズドセッションを企画し、開催した。

セッションテーマ:「ユビキタス・ポストユビキタス時代における人間中心のサービス設計」

座長: 森博彦(武蔵工業大学)

講演:

“Implication for User’s Acceptability of Ubiquitous Computing in Daily Life”

平沢尚毅、柴垣知記、相沢直人(小樽商科大学)、葛西秀昭(北海道日本電気ソフトウェア)

“ポストユビキタス時代におけるデザイン課題”

郷健太郎(山梨大学大学院)、平沢尚毅(小樽商科大学)、葛西秀昭(北海道日本電気ソフトウェア)、黒須正明(メディア教育開発センター)

“コンピュータにより強化された道具を介した技能の保存・伝承”

神保友香、牟田隆博、森博彦(武蔵工業大学)

“パブリックスペースでの安心な情報利用のための情報デザインに向けた試み”

飯塚重善、片桐有理佳(NTT サイバーソリューション研究所)

“地域密着型災害情報ウェブサイト構築の研究-地域の特殊性と時間経過に基づいた災害情報提供を目指して-” 今福珠英、山本栄(東京理科大学)

4) 第 36 回関東支部大会におけるシンポジウムの開催

平成 18 年 12 月 2 日に開催された関東支部大会において、アーゴデザイン部会との共催でシンポジウムを開催した。

アーゴデザイン部会と共催でシンポジウムを行った。テーマ、内容は下記の通りである。

テーマ:「ユビキタス時代のユニバーサルデザイン」

司会: 野村昌敏(NEC)

講演:

「家電ネットワークを用いた生活異変の検知技術」 松岡克典(産業技術総合研究所)

「ユビキタス時代の観察手法」 新家敦(島津ビジネスシステムズ)

「ユビキタス 3 層モデルの人間中心設計」 森博彦(武蔵工業大学)

「ユビキタス時代のコンセプト開発手法実践事例-デザイン学生が制作したアウトプットの変化を通して-」 上田義弘(富士通)

「IAUD におけるユニヴァーサルデザインマトリックスの研究」 渥美文治(トヨタ自動車)

「UD マトリックスの展開-ユビキタス時代を考慮して-」 山崎和彦(日本アイビーエム)

5) 合宿研究会の開催

平成 19 年 3 月 9～10 日にアーゴデザイン部会との共催で、合宿研究会を開催した。この研究会では、まず、話題提供として 3 名が講演し、その後、グループに分かれてペルソナ法によるユビキタス時代の情報サービス開発の実践を行い、発表を行った。

話題提供

「フォトシナリオ、フォトエッセイの実践から(1)」森博彦(武蔵工業大学)

「フォトシナリオ、フォトエッセイの実践から(2)」上田義弘(富士通)

「フォトシナリオからのペルソナの導出」山崎和彦(日本アイビーエム)

6) ワークショップの開催

平成 19 年 3 月 31 日にワークショップを行った。テーマ、内容は以下の通りである。

テーマ:「システムの要求分析と人間工学」

司会:平沢尚毅(小樽商科大学)

講演:

「情報システムに対する、これまでの情報社会人間工学部会における取り組み」平沢尚毅(小樽商科大学)

「システム要求事項を開発する上で気を付けたいと感じたこと-社内問題発見解決対応で気がついたこと-

安達賢二(株式会社 HBA 経営管理本部品質管理部)

「コンテクスチャル・デザインの要求分析の考え方」井上敦夫(小樽商科大学)

「仕様特性軸の考え方」柴垣知紀(小樽商科大学)

ディスカッション

「システムの要求分析における人間工学の役割」

(3) 成果

アーゴデザイン研究部会とのシンポジウム開催と合同研究会を通じて、ユビキタスコンピューティングにおける人間工学的課題、ユビキタス社会のとらえ方として 3 層モデルの考え方が共有することができ、また、サービス開発方法としてフォトシナリオ法を様々なところで実践し、広く活用されるようになった。また、これらの成果は他学会でのオーガナイズドセッションとして発表し、他学会にも広めることができた。また、システム開発における要求分析の人間工学的手法を検討していく足がかりができた。

(4) 問題点

研究部会のテーマの重要性は、シンポジウムや合同研究会を通じて理解していただいているが、まだ、多くの学会員の方には理解が浸透しているとは言えない。そのため、ホームページ等を通じた広報活動が必要と思われる。

(5) 展望

ユビキタス社会におけるインタラクションやサービス・コンテンツの人間中心設計方法を確立し、ユニバーサルデザインとの関係についてもより深めていく。また、それらの成果は、アーゴデザイン部会とともに学会誌で特集号を組んでいくことを計画している。さらに、新しい要求分析法を開発し、それらを上記テーマと組み合わせることで、人間中心の情報システム開発やユビキタス社会を導く方法に貢献していくことを目指している。

5-11. 聴覚コミュニケーション部会

{部会長:江袋 林蔵}

[概況] 聴覚コミュニケーション部会は、分散している研究の成果を収集し研究者間で共有できるようにすることを当面の目標にしている。平成 18 年度も前年度に引き続き、ホームページの内容充実、当部会研究会およびシンポジウムの開催、IEA2006 での活動、音響学会との研究会の共催等の活動を通じて「聴覚と人の行動・営み」に関する基礎的研究から産業界における人間工学的応用研究にわたる広範な領域での各種研究成果が報告され、時系列的な音環境の人の各種行動への関わり方に関する多くの知見の共有が図られ活動を軌道に乗せることができた。

[活動状況] 平成 18 年度の活動状況は以下の通りである。

1. 部会運営

(1) 部会第 3 年次の基盤整備: 部会員の大幅な増加に伴う幹事会メンバーの増員と一部交代が行

われた。幹事会は部会長を長として幹事3名、計4名構成となった。

- (2) 広報活動: 学会各行事における部会活動・学会サイトでのホームページの充実・研究会・部会幹事会・部会員消息等、部会内外の情報をニュースレター(20号まで発行)により部会内に広報し、内外に対するコミュニケーション活動を行っている。

2. 研究活動:

- (1) シンポジウム: 平成18年6月11日 日本人間工学会第47回大会(於大阪市大)

「音環境と人間工学」オーガナイザ・座長 桑野園子 (大阪大学大学院)

ディスカッサント 難波精一郎(大阪大学大学院)

S5-1 連続判断法と視覚的トラッキング 加藤徹(追手門学院大学)

S5-2 音と映像に合わせた打印の時間制御-音楽ゲームの人間工学的考察-山田真司(金沢工業大学)

S5-3 高齢者の音声の聞き取りについて-騒音を考慮した場合-水浪田鶴(産業技術総合研究所)

S5-4 機械音の音質設計 橋本竹夫(成蹊大学)

一般講演:

1D1-1 フーリエ記述子法による「読唇技術」開発の試み

-唇の輪郭形状による音の推定-義平真昭(大阪府立大学大学院) 有馬正和、奥野武俊

1D1-2 誤聴に関わる人と単語の地域性と親和感の調査 江袋林藏(SAU研究機構)

- (2) 当部会主催第1回聴覚コミュニケーション研究会: 平成18年8月22日(於神奈川工科大学)

オーガナイザ: 徳弘一路(神奈川工科大) 幹事: 高尾秀伸(神奈川工科大)

I. 講演

AEG2006-01 IEA2006 聴覚人間工学シンポジウム参加報告 高尾秀伸(神奈川工科大)

AEG2006-02 サラウンド環境による音場を利用した表現の事例 黒川真毅(神奈川工科大)

AEG2006-03 ピアノ音シミュレーションの現状について

西口磯春、佐々木正孝、山本亜樹、長谷川賢治(神奈川工科大)

AEG2006-04 模擬FM型反響定位音の試聴実験 原圃正博(高松高専)

AEG2006-05 野鳥における聴覚コミュニケーション

高澤嘉光(電通大)、廣瀬邦彦(日本鳥学会&本州産クマガラ研究会会員)

AEG2006-06 電磁石スピーカーのフェライト磁石スピーカーに対する音質優位性の実証と特性の考察

石川智治、野尻一実、三井実(JAIST)、宮原 誠(中央大学)

AEG2006-07 家電機器における音声案内のありかた 西山憲治(松下電器産業(株))

AEG2006-08 産業機器用に作曲された合図音の心理的評価 中嶋鴻毅、小野雅子(大阪工業大)、市丸朋史(大阪大)

AEG2006-09 聴覚評価テストのための単語リストの相異度仕様 江袋林藏(SAU研究機構)

II. 見学

(a) 5.10H音響システム 黒川真毅(サウンドクリエイティブスタジオ)

(b) 3次元音響システム 高尾秀伸(音響信号処理室)

(c) 演奏法研究用ギター 徳弘一路

(第1回AFG研究会 以上)

- (3) 第2回日本音響学会共催 聴覚研究会: 平成18年12月-17日(於九州大学大橋キャンパス)

聴覚研究会 委員長 伊藤憲三(岩手県立大学)

副委員長 加藤宏明(ATR 認知情報科学研究所)

幹事 坂本真一(株オトデザイナーズ)

古川茂人(NTT コミュニケーション科学基礎研)

小野順貴(東京大学)

開催地世話人 上田和夫(九州大学)

・共催：

九州大学 21 世紀 COE プログラム「感覚特性に基づく人工環境デザイン研究拠点」、
日本バーチャルリアリティ学会 VR 心理学研究委員会、
日本人間工学会聴覚コミュニケーション部会、および日本音響学会九州支部

I. 英語セッション

1. The Counterpart of Time-shrinking in Playing Regular Sounding Triplets of Tones on the Alto Recorder
Gert ten Hoopen, Roel Boon (Leiden Univ.), ○Takayuki Sasaki (Miyagi Gakuin Women's Univ.) & Yoshitaka Nakajima (Kyushu Univ.)
2. A Principle of Qualitative Evaluation on Dictation Error
○Rinzou Ebukuro (SAU Research Organization)
14:30 -14:45 Break
14:45 -15:45
3. Anatomical Features of Monkey Primary Auditory Cortex Revealed by Neurofilament Staining: Comparison with Primary Visual and Vestibular Cortex
○Hiroko Kosaki (Tokyo Hospital for National Printing Bureau)
4. Unambiguity of Sound Localization Enhances Audio-Visual Prior Entry Effect
○Yuki Hongo, Shinichi Kita (Kobe Univ.) & Yoshiharu Soeta (AIST)
15:45 -16:00 Break
16:00 -17:00 Invited Talk
5. The Perception of Color and Surface Material in Binocularly-Viewed Three-Dimensional Scenes
○Laurence T. Maloney (New York Univ.)

II. 日本語セッション

6. 頭部近傍における立体音像定位の向上に関する一手法
○吉田明弘、松村友哉、岩永信之 (大阪大)、小林互 (アーニス・サウンド・テクノロジーズ)、尾上孝雄 (大阪大)
7. 頭部伝達関数による立体音像移動の移動感向上に関する一手法
○松村友哉、岩永信之 (大阪大)、小林互 (アーニス・サウンド・テクノロジーズ)、尾上孝雄 (大阪大)
8. 視覚と聴覚の同時性における刺激条件の影響 ○山口泰優、岡嶋克典 (横浜国立大)
9. 視覚情報と歩行情報の相互作用について
○島村達也 (長崎総合科学大)、関口啓貴 (コネクタス)、北島律之 (長崎総合科学大)
10. 回転ベクションの回転軸 ○伊藤裕之 (九州大)
11. (招待講演) バーチャルリアリティを利用した心理療法 ○宮野秀市 (宮崎大)
12. 15~17歳の高校生を対象とした純音聴力測定 - ISO 7029改訂を目的として -
○水浪田鶴、倉片憲治 (産総研)、松下一馬 (評価機構)
13. 自動車内のサイン音に望ましい音響特性 ○田口 学、岩宮眞一郎 (九州大)
14. ストラディバリウス演奏音の解析と聞き比べ実験
○徳弘一路 (神奈川工科大)、出口貴博、高澤嘉光 (電気通信大)、山家清彦 (ソナ・リサーチ)
15. 分離音現象における分離音の高さの知覚における音の始まりと終わりとの重みづけについて
○鄭鐘海、中島祥好、Jonathan Goodacre、大塚耕司、黒田剛士 (九州大)
(第2回音響学会共催研究会 以上)

(4) 国際会議: IEA2006 Symposium

IEA2006 Symposium: Auditory ergonomics, Ellen HAAS (US Army R&D)
Session 1 Auditory displays in vehicles systems

Chair HAAS, E. (US)

1. Park, M. (KR) (Cancelled): Effects of auditory cues on visual perception for Human-Vehicle Interactive Models (HVIMs).
2. Baldwin, C. (US): Verbal CASs reduce crash potential in older drivers.
3. Jonsson, I. (US): Detecting and responding to emotional speech in cars.
4. Laroche, C. (CA): Investigation of an accident involving the revers alarm on a heavy vehicle.
5. Hellier, E. (UK): The effect of auditory feedback on performance in a driving simulation game.
6. Takao, H. (JP): Effectiveness of supplying ITS urgent information with perspective of 3D sound localization.

Session 2 Issues in Auditory ergonomics

Chair Chen, F. (TW)

1. Bliss, J. (US): The effect of alert succession and task criticality on alarm reactions.
2. Aj Osman, R. (CA): Optimal installation of acoustic warning devices in the workplace.
3. Balwin, C. (US): Sensory-cognitive interactions in young and older listeners.
4. Calander, O. (SE): Horizontal location accuracy with COTS and professional 3D audio displays technologies.
5. Hasse, E. (US): Audio-warning cues to assist visual search in narrow field-of-view displays.
6. Isii, H. (JP): Development of a game for the visually impaired.

他 Lunch Time Meeting 参加

(以上、IEA2006の学会への報告は、人間工学 Vol. 43 No. 2 pp. 101-102 参照)

(IEA2006 以上)

5-12. 人間融合ロボット分野アカデミックロードマップ研究部会 {部会長: 富田 豊}

本研究部会は、経済産業省より、ロボット分野に関するアカデミックロードマップ(ARM)の作成に関する研究を行う委託を受けた。詳細は以下の通りである。

- (1) 今回のロボットに関する研究の名称は「ロボット分野に関するアカデミックロードマップ作成に関する研究」である。仕組みは、経済産業省が日本総合研究所に研究委託し、日本総研が日本人間工学会・日本ロボット学会・人口知能学会との間に前記ロードマップ作成に関する覚書を作成して研究を行うものである。
- (2) 組織形態は日本総研に、3 ロボット関連の ARM 委員会を設置(①情報系複合領域 ARM 委員会、②工学系先端領域 ARM 委員会、③人間系融合領域 ARM 委員会)し、各 ARM 委員会は、関係する学会から推薦された 15 名の委員により構成され、各成果物をまとめる。人間工学会が関与する ARM は、③の人間系融合領域 ARM 委員会のみで、人間工学会・ロボット学会・人工知能学会からの各 5 名で構成される。
- (3) 3 学会は、ARM に委員を派遣するとともに、各学会内にそれらの研究を支援する WG(ワーキンググループ)を設置し、一定テーマの研究を取りまとめる。日本人間工学会では本研究部会を設置した。
- (4) 本研究のスケジュールは、全体報告書は平成 19 年 3 月末、WG の報告書は本報告に先だって、取りまとめることになる。
- (5) 研究費等については、ARM 関連は日本総研が原稿料・交通費(遠隔地の研究者には宿泊費等含む)を負担する。また、各学会の WG については、日本総研から文献調査委託費(各 100 万円)を学会に交付することになった。

- (6) なお、ARM の具体の研究テーマが決定する前に、WG の研究テーマを策定し、日本総研に提出する必要があるが、ARM のテーマと整合性を保つ必要からアバウトな計画—例えば「人間工学的等の文言を含ませた…」ものを考えてもらう必要がある。

その結果、5 回の幹事会(10 月 18 日、11 月 14 日、1 月 12 日、2 月 27 日、3 月 22 日)、3 回の人間系融合領域委員会(12 月 25 日、1 月 23 日、3 月 1 日)、および 3 回の部会(11 月 21 日(於テクノバ)、12 月 22 日(清水建設)、2 月 13 日(中大駿河台記念館))を開催し、意見交換、執筆内容の擦り合わせなどを行った。

2 月 14 日に、WG の「文献調査委託結果報告書」を日本総合研究所に提出した。

なお、WG の文献調査委託費については、研究会費に使用するとともに、後述の「人間工学誌」の別冊発行原資とする。

平成 19 年 3 月 31 日には、ARM の報告書を完成し、日本総研を通して、経済産業省に送付し、受理された。著作権は著者に、出版権は各学会に帰属することを確認している。

平成 19 年度に入り 4 月 2 日に部会を開いて、ARM で日本人間工学会が担当した部分について、「人間工学」43 巻別冊として発行する許可を編集委員会から得た。6 月下旬を目途に発行の準備をしている。

6. 認定人間工学専門家部会

{部会長:藤田 祐志}

事業計画にしたがい、以下のとおり活動した。

- (1) 資格認定試験(A 方式試験)を 1 回実施、受験 4 名、合格 2 名であった。また、筆記試験免除条項の適用(B 方式試験)を 2 回実施、受験 3 名、合格 2 名であった。なお、A 方式、B 方式とも英語による受験の受け入れ体制を整えた。
- (2) 大学の専門課程を修了した者などを対象とした新たな資格の導入を検討し、幹事会案をとりまとめた。
- (3) 前年度検討した再認定制度(生涯研修制度)を実施に移した。
- (4) IEA エンドースメント申請書類(英文)を作成し、平成 19 年 1 月に IEA 会長宛に提出した。
- (5) 部会ホームページ(和文および英文)を活用して部会員間の情報交換および本資格制度の広報を低コストで実現した。また、部会報を 4 回発行した。その他、資格認定試験受験者の参考となるガイドブックを作成販売した。

Ⅲ. 平成19年度事業計画

日本人間工学会第17期(2007年4月～2010年3月)

会長 斉藤 進

会長就任のご挨拶

第17期の日本人間工学会会長を務めさせていただき斉藤進です。

本学会は、1964年に設立されて以来、実践的な科学技術としての人間工学を活用することにより、健康で安全な社会の実現に貢献すべく幅広い領域で活動してまいりました。この間、学会員の研究成果は、全国大会や支部大会及び研究部会で討議されるとともに、機関誌「人間工学」等に掲載し広く活用されています。

国際人間工学連合(IEA)から国際資格として認証されている認定人間工学専門家制度を始め、人間工学 ISO/JIS 規格を審議し提案する等、当該分野で多くのエキスパートを擁する学会として国内外に貢献しています。また2030年頃までを見通し、人間工学の重要課題を解決するまでの道筋を示した人間工学技術戦略ロードマップ案を策定し、IEA 大会や横幹連合シンポジウム等の国内外における学術集会で公表し、その先見性と内容が高く評価されています。暫定的なロードマップ案は、本学会ホームページで公開しています。

本学会は、社会に役立つ実践的な活動として、次の3項目を目標として掲げます。

社会へ向けた人間工学の展開

- (1)人間工学を社会常識とすることにより、安全で安心できる社会を実現
- (2)社会ニーズ及び学術ニーズに沿った存在感のある学会を指向
- (3)人間工学により問題解決が可能となるサクセスストーリーを展開

そしてこれらの目標を具体化するために、学会として以下のことを実行します。

学会としての具体的活動

- ・人間工学実践家及び若手会員を積極的に活用し、学会活性化に有用な次世代人材を育成
- ・ホームページ等を活用し、学会活動をオープンにするとともに、社会へ向けて情報を発信
- ・研究部会等の成果を広く公開し、各分野の研究活動を社会的に活用
- ・委員会等を常設委員会・担当と臨時委員会・担当に分離し、成果を組織的に活用

2007年度の学会活動を担当する委員会等を一覧表として示しました。長期的かつ継続的に事業を実施する常設委員会・担当とは別に、特定の目標と期間を定めた上で成果を組織的に活用するため、今期から臨時委員会・担当を新たに設置することにしました。臨時委員会等の活動により、更なる学会活性化に役立つ新しい提案ができることを期待しています。

私は、大久保堯夫前会長の多大な実績を引継ぐとともに、青木和夫副会長をはじめ新理事会を構成する方々や会員諸氏等のご協力を頂くことにより、人間工学の一層の普及を図りたいと考えています。もとより本学会は、人間工学が本来果たすべき役割の大きさに比べ、必ずしも十分な実力を蓄えてはおりません。また、大人になり過ぎた組織には、新たな未来を描くことができません。今後とも、会員諸氏とともに

日々研鑽を積み重ねることにより、人間工学の実践を目指した活動成果を積極的に発信してまいります。本学会活動の成果を社会へ還元し、真に社会から期待される学会とするためにも、多くの学会員の方々のご意見ご要望等を学会事務局宛にお寄せいただくよう、よろしくお願い申し上げます。

日本人間工学会第17期 委員会/担当等一覧

委員会/担当名称	担当理事・委員長等	活動のポイント等
常設委員会・担当		
総務担当	斎藤真、三林洋介	
財務担当	垣本由紀子、外山みどり	
広報委員会	酒井一博	HP 運営による情報公開及び他学協会等との情報交換や連携
編集委員会	加藤象二郎	学会誌の編集・発行及び大島賞と研究奨励賞受賞候補者の選考
国際協力委員会	堀江良典	IEA 理事会、日韓共同シンポジウム、その他の国際協力活動への対応
ISO/TC159 国内対策委員会	横井孝志	ISO/TC159 に関わる規格審議
表彰委員会	阿久津正大、平柳要	表彰制度の検討、名誉会員及び功労賞受賞候補者等の選考
日本学術会議担当	斉藤進、青木和夫	学術会議との連携等
認定人間工学専門家部会	青木和夫	IEA 認証取得及び資格制度の広報等
臨時委員会・担当		
将来計画委員会(新設)	青木和夫	次世代 JES の在るべき組織・事業等に関する提案
人間工学技術戦略委員会	藤田祐志、富田豊	JES ロードマップのローリング及び人間融合ロボット分野 ARM 研究部会との連携
支部・部会・大会担当(新設)	福田康明、斎藤真	支部・部会担当: 支部及び研究部会活動の見直しと提案 大会担当: 年次大会の効率的運営方策等の提案
法人化担当	大久保堯夫	文部科学省対応

1. 事業計画

{総務担当:斎藤 真}

- (1) 社団法人日本人間工学会を実現するため、主務官庁との情報交換を密にするとともに、法人化関連の学会内の運営諸内規等の整備を推進する。
- (2) 第48回大会を福田康明大会長のもと平成19年6月2日～3日に名城大学で開催する。
- (3) 評議員会および定期総会を平成19年6月2日に名城大学において開催し、平成18年度事業報告・収支決算、平成19年度事業計画・収支予算の審議等を行う。
- (4) 第49回大会を間壁治子大会長のもとで開催することとし、準備を進める。学会に設置した大会担当と連携し、年次大会の効率的な運営を目的に具体的な方策の検討を行う。
- (5) 理事会を年6回開催する。
- (6) 機関誌「人間工学」の第43巻2～6号および第44巻1号の計6冊を発行する。
- (7) 認定人間工学専門家資格認定試験(A方式試験)を年1回、筆記試験免除条項の適用(B方式試験)を年2回程度実施する。人間工学準専門家、人間工学アシスタントの第1回資格審査、再認定制度(生涯研修制度)の推進等の活動を行う。また本資格制度の対外アピールを積極的に行う。IEAの認証を取得し制度の充実を図る。
- (8) 長期的に事業を行う常設委員会・担当と、特定の目標を定め次年度総会までに得られた成果を学会として組織的に活用する臨時委員会・担当を置くこととした。常設委員会・担当として、広報委員会、編集委員会、国際協力委員会、ISO/TC159国内対策委員会、表彰委員会、日本学術会議担当、また臨時委員会・担当として、将来計画委員会、人間工学技術戦略委員会、支部・部会・大会担当、法人化担当を設置し、各事業を積極的に進める。
- (9) 人間工学技術戦略ロードマップに関して学会内の意見をまとめて策定し、継続して更新を図る。これを素材に経産省、国内の関連学術団体、PPCOE(汎太平洋産業人間工学会)やIEA(国際人間工学連合)などの国際学術団体と連携して種々のロードマップ策定に協力していく。
- (10) 支部活動および研究部会活動を推進するとともに活動の見直しを行う。研究部会は、医療安全研究部会、衣服人間工学部会、航空人間工学部会、アーゴデザイン部会、感性情報処理・官能評価部会、看護人間工学部会、海上人間工学研究部会、口と健康部会、情報社会人間工学研究部会、聴覚コミュニケーション部会、人間融合ロボット分野アカデミックロードマップ研究部会、触覚インタラクション研究部会の計12部会で活動を行う。
- (11) IEAと連携して様々な国際協力活動を推進する。IEA理事会(8月25～26日、ボストン)への出席、IEAアワード申請への協力、IEA内の各委員会への協力を行う。ESK(大韓人間工学会)/JES合同シンポジウム(5月25～26日、韓国、水原)開催について協力するとともに、平成20年度開催に向けて準備を進める。
- (12) 賛助会員を対象とした講演会(兼、一般に向けた人間工学啓発のための講演会)を平成20年1月に開催する。
- (13) 平成19年度研究奨励賞を受賞者に授与する。また平成20年度大島正光賞および研究奨励賞の受賞論文を選考する。名誉会員候補・学会功労賞候補の選考、国際表彰への対応、表彰制度の整備を行う。
- (14) 産学官連携を含めた他学会等との共同事業を広く展開するとともに、人間工学の社会への普及および啓発を図るため、公開講座、セミナー、シンポジウムの開催および共催等の事業を行う。
- (15) 日本学術会議との連携強化、関連学術団体との連絡および協力を進め、人間工学の普及に努める。

2. 委員会・担当活動

[常設委員会・担当]

長期的に事業を行う常設委員会等として、以下を置く。

2-1. 広報委員会

{委員長:酒井 一博}

- (1) 基本的に従来の方針を継承する。学会内の理事会、支部、委員会、研究部会等と連携・協力のもと、ホームページを中心に広報活動を推進する。
- (2) 新たな視点で広報活動を発展させるために、関連の学協会との情報交換や共同事業の企画などに積極的に参加する。
- (3) 学会委員会に相応しい活動を行うために、体制の整備を図る。
- (4) 広く学会員の意見を聴取することによって、将来の広報活動のあり方を検討・提案する。

2-2. 編集委員会

{委員長:加藤 象二郎}

学会誌「人間工学」の年6号分の通常の編集・発行業務に加えて、以下の事項について検討を行う。

- (1) 投稿原稿の査読に関して、さらなる効率化と迅速化をはかる。
- (2) 査読者(編集委員を除く)に対する薄謝を検討する。
- (3) 学会員からの提案企画、企業、研究機関における人間工学的活動の掲載について検討する。
- (4) 編集委員会のホームページをさらに充実させ、学会員ならびに論文投稿者の利便をはかる。
- (5) 平成20年度の「大島正光賞」「研究奨励賞」について、受賞者の選考を行う。

平成19年度の編集委員会は、奇数月に開催を予定している。なお、必要に応じて偶数月には電子編集委員会を開催する予定である。

2-3. 国際協力委員会

{委員長:堀江 良典}

- (1) 第10回日韓ジョイントシンポジウム(5月25~26日、韓国、水原)開催に際し、大韓人間工学会国際担当と連携してJES窓口として会員参加への協力
- (2) IEA理事会((8月25~26日)への参加 ポストン(米国)
国際協力委員がcouncil memberとして3名、ならびにalternate member1名が出席予定
- (3) 国際協力活動およびその他
 - ・IEAアワード申請への協力
 - ・IEA内の各委員会への協力
 - ・学会内各委員会などへ国際協力委員としての参加

2-4. ISO/TC159国内対策委員会

{委員長:横井 孝志}

今年度から、人間工学JIS委員会をISO/TC159国内対策委員会の中に組込んだ新しい体制で、人間工学関連国際規格およびJIS規格の審議、策定に対応する。国際標準化戦略目標やそれを達成するためのアクションプランを考慮した活動を進める。

- (1) 委員会体制と基本活動方針

人間工学関連規格の策定や審議に関する人材の育成にも配慮しながら、比較的若い年齢層から委員を選出するよう努める。産業の活性化や国際競争力強化に繋げ得るように、企業あるいは産業界からの委員を歓迎する。人間工学 JIS 委員会については各 SC と同列に位置づけ、各 SC が担当する ISO 規格を JIS 化する際の検討、あるいは JIS 規格を ISO 化する際の各 SC への提案窓口とする。ISO 規格を翻訳した JIS 規格の策定よりも、JIS 規格を ISO 規格に反映することを念頭に置きながら、規格の策定や審議を行う。加えて、国内外の産業界で使われる JIS 規格、ISO 規格の策定を目指す。

(2) ISO/TC159 規格策定業務への対応

1) 審議・策定方針

SC1、SC3、SC4、SC5、WG2 における個々の規格原案の吟味や投票案件に対応すると共に、日本からの NWI 提案や改訂作業への積極的関与に努める。特に、個々の SC における規格審議に高齢者、障害者の視点を盛り込み、投票内容やコメントに反映させる。さらに NWI 提案や原案審議では、国内外の産業界での重要性や日本を含むアジア圏の状況を反映した内容を盛り込む。

各 SC、WG における活動状況や審議規格については「人間工学 ISO/JIS 規格便覧 2007」等を参照のこと。

2) 会議

TC159 国内委員会 3～4 回程度。分科会は必要に応じて延べ 30 回前後開催予定。

(3) 人間工学 JIS 規格策定業務への対応

1) 審議・策定方針

産業界における重要性や工業標準化法に照らしながら人間工学関連 JIS 規格を策定する。JIS 規格提案においては日本人間工学会あるいは関係団体から希望案件を募る。ISO 規格の翻訳にもとづいて JIS 提案を行う場合には、事前に提案の必要性や活用頻度等を吟味しておく。日本国内のデータや知見にもとづいて JIS 化提案を行う場合には、提案の必要性や活用頻度等を考慮するだけでなく ISO への提案も視野に入れながら原案作成に努める。検討の際の委員会構成においては、内容に応じて日本人間工学会会員や関係団体からも委員を募る。

2) 委員会体制

現在の提案 JIS 規格内容や提案件数も考慮しながら、委員会体制を至急整備する。

3) 会議

JIS 原案作成案件数や作業状況に応じて設定する。

(4) その他

1) 国際標準化戦略目標やそのアクションプラン改訂のための基礎情報を提供する。

2) 人間工学 ISO/JIS 規格便覧については引き続きアップデートを進める。

2-5. 表彰委員会

{委員長:阿久津 正大}

(1) 委員会開催予定

数回程度の全体委員会の開催のほか、随時電子メールでの討議を予定。

(2) 活動内容

1) 表彰制度のあり方の検討等に資するために、他学会等の表彰制度に関わる情報を収集する。

2) 表彰制度のあり方、各賞の役割分担、選考システム、選考基準等について検討し、表彰制度の整備を進める。

3) 名誉会員候補者の選考を行う。

- 4) 日本人間工学会功労賞の受賞候補者の選考を行うとともに、表彰の準備を進める。
- 5) 国際表彰に関して、国際協力委員会との役割分担を明確化するとともに連絡を密にして、IEA からの推薦依頼について対応する。

2-6. 日本学術会議 {日本学術会議担当: 齊藤 進、青木 和夫}

- (1) 日本学術会議との連携の拡充
日本学術会議は 2005 年 10 月の改正法施行により新体制が発足した。今後とも、日本学術会議との連携を密接にするとともに、日本学術会議主催の諸活動等へ積極的に参加することとする。
- (2) 日本学術会議主催の安全工学シンポジウムへの協力
2007 年 7 月に開催される安全工学シンポジウム 2007 を当学会が共催し、実行委員を派遣する等の協力を行う。

[臨時委員会・担当]

特定の目標を定め、次年度総会までに得られた成果を学会として組織的に活用する臨時委員会等として、以下を置く。

2-7. 将来計画委員会 {委員長: 青木 和夫}

- (1) 学会活性化のための方策の検討
学会活動や運営上の問題点を整理し、将来に向けての活性化の方策とそのための組織運営方法について検討を行う。
- (2) 学会の社会的貢献の検討
人間工学に対する社会のニーズに応えるための方策と学会組織、学会活動の内容について検討を行う。

2-8. 人間工学技術戦略委員会 {委員長: 藤田 祐志}

- (1) 今後、長期間にわたって人間工学技術ロードマップの継続的更新や、官庁による人間工学技術ロードマップ作成支援、他学会等との共同による同様な活動の根拠となる基本方針の明文化やルール等の整備を進める。
- (2) 人間工学技術ロードマップにもとづく様々な学会活動や、IEA や他学会との協力の可能性について検討し、提言を行う。
- (3) 人間工学技術ロードマップ(ドラフト版)を更新する。
- (4) 官庁による人間工学技術ロードマップ作成や、他学会等との共同活動に協力する。
その他、さまざまな学会等において本活動を紹介し、広報、他学会等との共同活動の活性化に努める。(例:2007 年 5 月 26 日日韓ジョイントシンポジウム)

2-9. 支部・部会・大会 {支部・部会・大会担当: 福田 康明}

- (1) 支部活動の活性化
現在の会員数は首都圏が多くなっているが、地方会員数の増加、支部活動の評価、支部区分の見直し等、支部活動の活性化方策を検討する。
- (2) 研究部会活動の見直し
研究部会の新たな仕組み(活動計画、報告、評価、改善等)を構築すると共に、補助費の見直しを検討する。また研究部会活動の成果報告書を公開する等の透明性の確保を進める。

(3) 大会運営の効率化

現在の年次大会では、開催校が実行委員会を発足させ、計画・立案・運営を行なっているが、過去の大会での問題点や課題等について、その内容の継続性や引継ぎ事項を整理し、年次大会ごとの大会運営の効率化を目指す具体的な方策を検討する。

2-10. 法人化

{法人化担当:大久保 堯夫}

平成 19 年度は可能な限り、早期法人化実現を図るため文部科学省との連絡を緊密にすると共に、学会運営諸内規の整備を推進する。

具体的な活動は次の通りである。

- (1) 定款案の見直し
- (2) 学会運営に関する諸内規の整備
- (3) 平成 18 年度の学会諸活動及び変更に関し、文部科学省に提出済み既往資料の差し替え資料の作成・提出

3. 支部活動

3-1. 北海道支部

{支部長:横山 真太郎}

- (1) 平成 19 年度支部大会および総会
大会長:酒井正幸(札幌市立大学)
日 時:平成 19 年秋
場 所:札幌市立大学
- (2) 会議
支部役員会

3-2. 東北支部

{支部長:北村 正晴}

- (1) 支部主催 研究交流会 年間 3~4 回程度
本年度から、運営方針を抜本的に見直した。東北支部の所要地域に活動拠点を形成することを目的として支部内の学術教育施設が立地している地域ごとの研究交流会を企画し実施する。
第 1 回の研究交流会は八戸市において下記のように開催する計画である。
- 1) 平成 19 年度第 1 回研究交流会
日時:平成 19 年 5 月 12 日(土) 午後 2 時から 5 時まで
場所:八戸大学総合研究所市内オフィス(市商工会館 6F)
(〒031-0076 八戸市堀端 2-3 Tel. 0178-73-3344)
司会進行:畑山俊輝(八戸大学)
第一セッション:14:00~15:00
講演 1:クルーズコントロールはドライバーの何に役に立つのか 畑山俊輝(八戸大学人間健康学部)
講演 2:八戸におけるバリアフリー推進の事例的研究 久宗周二(高崎経済大学経済学部)
第二セッション:15:30~16:30
講演 3:青森県田子町における心の健康づくり 滝澤透(八戸大学人間)

健康学部)

講演 4:生活リズムによる高齢者の安否確認

久慈憲夫(八戸工業高等専門学校

電気情報工学科)

(2) 支部役員会 年間 4 回程度を予定

各地域での研究交流会の企画・運営について討議する。また、それぞれの地域が面している人間工学に関連した研究トピックスの掘り起こしと認識共有、さらに連携強化を図る。

(3) 支部ホームページを開設しメーリングリストと併用して、情報の提供と支部活動の活性化に資する。

3-3. 関東支部

{支部長:堀江 良典}

(1) 第 37 回関東支部大会

開催日:平成 19 年 11 月 23 日(金)~24 日(土)

会 場:千葉大学西千葉キャンパス

大会長:勝浦哲夫(千葉大学教授)

(2) 支部委員会 年 2 回開催予定

(3) 基礎技法講習会、シンポジウム、卒業研究発表会、企業・研究機関交流、見学会などを開催予定

(4) ニュースレターの発行

3-4. 東海支部

{支部長:横森 求}

(1) 平成 19 年度日本人間工学会東海支部総会の開催

平成 20 年 3 月中に開催予定

(2) 平成 19 年度日本人間工学会東海支部研究大会の開催

開催日:未定

開催場所:名古屋市立大学医学部

大会長:榎原毅先生

(3) 日本人間工学会第 48 回大会準備と実施運営

(4) 講演会の開催

(5) 見学会等の開催

(6) 他学会との協賛

(7) 役員会の開催(2 ヶ月に 1 回程度の開催)

3-5. 関西支部

{支部長:岡田 明}

(1) 平成 19 年 6 月 第 1 回企画委員会

(2) 平成 19 年 12 月 1 日 第 1 回役員会

(3) 平成 19 年 12 月 1 日 支部大会(大阪府立大学)

(4) 平成 20 年 1 月 第 2 回企画委員会

(5) 平成 20 年 3 月 第 2 回役員会・総会

※平成 19 年度内に見学会を実施

3-6. 中国・四国支部

{支部長:大塚 彰}

(1) 第 40 回中国・四国支部大会

開催日:平成 19 年 12 月 1 日(土)

- 場 所:香川大学
大会長:土居俊一先生(香川大学)
- (2)理事会開催 3 回程度を予定
 - (3)支部講演会開催(2回程度)
 - (4)支部表彰の実施
 - (5)その他

3-7. 九州支部

{支部長:長谷川 徹也}

- (1)活動計画
 - 1)第 28 回支部評議員会
開催日:平成 19 年秋期開催予定
会 場:未定
 - 2)第 28 回支部大会および会員総会
開催日:平成 19 年秋期開催予定
会 場:未定
大会長:三宅晋司(産業医科大学)
 - 3)「九州人間工学第 28 号」の発送
- (2)その他

4. 研究部会活動

4-1. 航空人間工学部会

{部会長:垣本 由紀子}

〈H15. 4. 1～5 年以内〉

- (1)テーマ
航空人間工学分野における諸問題の検証および最新の知見の啓蒙を図る。
- (2)手段・方法
 - 1)例会の開催
今年度までは年間 2 回を基準として例会を開催し、会員ならびに関係者間での情報の交換および知識の普及を図ってきたが、年 2 回の開催は事務局および幹事の人的負荷が高いこと、また部会の財政的負荷が高いことから、平成 19 年度はトライアル的に年 1 回を基準として開催するよう変更する。一方、これによる本部会の活動に停滞が生じないよう、例会の開催時間の延長や、施設見学会の導入等、多彩な例会を企画し、内容の充実を図ることと致したい。
 - 2)インターネットホームページの運営
例会と異なり、非会員からの常時アクセスが可能であるとの利点を生かし、当会の活動内容を広く知らしめるため、インターネットを活用する。
 - 3)委員会・幹事会の開催
適時委員会・幹事会を開催し、部会活動を円滑に行うと共に、会員の意見を部会活動に反映させるよう努める。
 - 4)例会資料の電子ファイル化の継続
平成 19 年度に開催される例会資料を CD-ROM に追加し、これを継続して財団法人日本航空協会の運営する航空図書館に寄贈し、一般の供覧に提供する。
- (3)期待される成果
飛行安全は、官・民・学界および諸外国も含めた非常に多くの組織に係わる問題である。これらの関係者が交流し、情報を交換する場を当部会が提供することにより、飛行安全およ

び航空人間工学の推進が可能となる。

4-2. アーゴデザイン部会

{部会長:上田 義弘}

〈H15. 4. 1～5年以内〉

(1)活動テーマ

「ユビキタス時代のユニバーサルデザインー新たな手法を求めてー」

1)具体的な活動

当部会は平成 13 年度の合宿研究会でのテーマ「ユビキタス環境でのユーザビリティ」を平成 18 年度より「ユニバーサルデザインのためのユビキタス方法論」の具体的な展開を推し進めている。昨年度の全国大会、関東支部大会のシンポジウムと合宿研究会の情報社会人間工学研究部会との合同の方法論研究で、この方法論の人間工学への役割について議論し、ユビキタス環境に於けるユニバーサルデザインの具体的な事例研究の紹介を行った。今年度はその成果を受けて、当部会が産業界からの参加が多い特性を生かした更なる活発な活動が求められる。そこで、ユビキタス環境を基本としたユニバーサルデザインのための「ユビキタスデザイン方法論」をより具現化する「ユビキタス・ユニバーサルデザイン・マトリックス手法」(UU マトリックス)の提案を具体的な形にするための WG を展開し、例会を開催していく予定である。

2)期待される成果

ユビキタス社会における新たなサービス、システム、そしてインタラクションをユニバーサルデザインのために活用し、全ての人に公平なユビキタス環境を構築するための方法論を提供するための研究の場を設ける。この場で生まれる具体的なユビキタスデザイン方法論はダイナミックなユニバーサルデザインの飛躍的な進歩を進める道具として、部会員、学会員だけでなく、多くの開発者の実用的な方法論として各界に広めていくことを考えている。

3)ユビキタス WG とユニバーサルデザイン WG の統合的活動へ

ユビキタスワーキンググループの活動をより活発にし、研究の中でユニバーサルデザインインワーキンググループとの関わりを考えた研究を推し進めるため、両 WG を一体化した活動する。WG はアーゴソリューションマーケティングを活用し、部会員と外部協力者との連携を深めた研究活動を行う。これにより産業界のユニバーサルデザインに携わるデザイナーや設計者のユビキタスを活用する実践ツールとして、ユニバーサルデザインの新たな方法論が創れるように活動を進める。

4)独自ドメイン[ergo-design.org]による Web 広報活動の充実

部会では今期も独自ドメインによる Web の活用をより国際的な広報手段としてより充実させ、広報担当による海外向けバイリンガルの情報提供や会員相互の情報交換の享受できるインフラ整備を会員向けマーケティングリストネットワークの併用で実施して行く。

5)部会登録最終年度に当たるので過去 5 年間の成果報告書を編集、理事会に提出する。

(2)活動予定

4 月 幹事会

5 月 全国大会シンポジウム準備

6 月 第 48 回全国大会

テーマ「ユビキタス時代のユニバーサルデザイン(ダイナミックなユニバーサルデザインを目指して)」

7 月 幹事会

8 月 コンセプト事例発表会

9 月 幹事会

10 月 見学会

11 月 関東支部大会シンポジウム開催

12 月 幹事会

- 2月 幹事会
- 3月 合宿研究会/総会/幹事会

4-3. 感性情報処理・官能評価部会

{部会長:市原 茂}

<H15. 4. 1～ 5年以内>

(1) 目的

当部会は、感性情報処理と官能評価に関わる諸問題を、基礎から応用まで幅広く、様々な角度から討論する場を設けることを目的としている。

(2) 活動テーマ

感性の主体である「人間」に関する先端的な研究や、感性手法を用いた研究事例を紹介するとともに、感性情報処理・官能評価の立場からの検討を進め、また、「人を物差しとして測る」ための手法についても幅広く検討したい。そのために、関連する諸学会・研究会との連携も深めていきたいと考えている。また、若手研究者の研究意欲を喚起し、具体的なアウトプットを生み出してゆく支援となる場としての機能を充実させるため、例会を開催し、修士論文や卒業論文を作成中の学生など発表を積極的に取り上げたいと考えている。

(3) 活動内容

若手研究者への啓発や手法の会得を目的とした例会、さらには、例年行っている外部講師を招聘した講演会もあわせ、年間6回程度開催する予定である。関連する諸学会・研究会との共同企画も増やしていきたい。また、例年同様、システム連合大会でも当部会を中心としたセッションを設ける予定である。

4-4. 看護人間工学部会

{部会長:阿曾 洋子}

<H15. 4. 1～ 5年以内>

(1) 活動目的

社会的背景や科学技術の進歩に合わせ、人間工学に基づいた看護人間工学の独自性を明確に打ち出していくための研究成果を積み上げていくことを目的とする。

(2) 活動内容及び計画

1) 総会・講演会・公開研究会 平成19年9月22日(土)

会 場:札幌市立大学看護学部(札幌市)

主 催:樋之津淳子(札幌市立大学看護学部)

2) 看護人間工学研究誌第8巻 平成20年2月発刊予定

3) 第16回システム連合大会 平成20年3月参加予定

4) 研究成果の発信と会員の獲得

・ホームページの随時更新と活性化(研究成果の abstract に英語版を設ける)

・第7回福祉・ユニバーサルデザインコンテスト(平成19年7月21日、神奈川工科大学にて開催)にて、後援予定

5) 日本人間工学会との研究成果の共有

・「人間工学技術戦略ロードマップ」への協力

・本部会員の日本人間工学会への入会並びに日本人間工学会会員の本部会への入会の推進

4-5. 海上人間工学研究部会

{部会長:大橋 信夫}

<H15. 4. 1～5年以内>

(1) 活動テーマ

前年に続いて、第一次産業の労働に関するテーマを取り上げる。また海上労働に関して、この5年間の総括を行なう。

(2) 手段・方法

1) 研究会の開催

第一次産業の労働に関して、前年度シンポジウムで検討した就業者や労働環境に関する内容を基に、農業、林業及び漁業の各産業間のつながりや将来像について、産業に関わりのある様々な立場から検討を行なう。また、海上労働に関する総括として、これまでの研究課題や内容等に関して資料を作成するための作業部会も計画している。

2) 部会ホームページの更新

部会の活動報告や関係者間の情報交換および学会員への情報提供の場として、ホームページの内容を随時更新していく。

(3) 期待される効果

農業、林業、漁業の労働について、労働内容や労働環境および技術や技能に関する共通点や相違点を明らかにし、次世代の第一次産業像について議論を深めていきたい。こうした活動を通して第一次産業を対象とした“学”の連携を図り、共通課題に取り組む組織を構築することが期待できる。また、5年間の部会活動の総括を行なう中で、海上労働、特に漁業労働に関して今後必要とされる主な研究内容や検討項目が明らかになることが考えられる。

4-6. 口と健康部会

{部会長:山本 宏治}

<H16. 4. 1~5年以内>

(1) 活動テーマ

口と健康部会では、今年度も、歯科医療、歯科医学および歯学教育にまつわる諸問題に対して人間工学的な立場からの解決を目指して研究に取り組み、歯科医学界に人間工学的手法の重要性を啓蒙するための活動を行っていく。

近年の歯学卒前教育では、従来の医学的知識重点の教育にかわって、実際の治療技術や医療面接等の対話技術などの臨床能力養成の重要性が認識されるようになってきた。臨床実習直前に行われる共用試験における「客観的臨床能力試験」や、歯科医師国家試験への実技試験の実施などが議論されている中、臨床技能の効果的な教育法および評価法ははまだ確立されているとはいえない。本部会では、人間工学的立場から、歯科医療技術教育のための指針、効果の高い教授法、妥当性の高い評価法について提言していきたい。

加えて、超高齢社会を目前に控えた本国での車椅子使用者、また高齢者に限らずともスポーツ事故あるいは交通事故等により一時的に車椅子使用を余儀なくされた患者の歯科治療の需要は当然の事ながら急増している現状がある。術者と患者双方が安全かつ身体に負担の掛からない、あるいは負担を軽減するための車椅子対応歯科ユニットが求められており、歯科医療空間のバリアフリー化を含め、ニーズ増加に対応すべく車椅子の規格化についても提言していきたい。

(2) 活動内容

1) 第23回研究発表大会

平成19年9月2日(土)、第23回研究発表大会を開催する。これに伴う講演論文集を発行する。

2) 幹事会開催

6月、9月、12月

3) 部会ホームページの更新

4-7. 情報社会人間工学研究部会

{部会長:森 博彦}

<H16. 4. 1~5年以内>

(1) 平成19年度研究部会テーマ

「ユビキタス時代のユニバーサルデザイン」および「要求分析と人間工学」

(2) 活動内容(手段・方法)

1) 全国大会における合同シンポジウムの開催

平成19年度日本人間工学会全国大会において、「ユビキタス時代のユニバーサルデザイ

ンダイナミックなユニバーサルデザインを目指して」のテーマで、下記の内容のシンポジウムをアーゴデザイン部会と共催する予定である。

・司会: 新家敦((株)島津製作所)

・講演

1. 染谷裕氏

所属 株式会社 デジオン 企画・マーケティング統括

題名 家電ネットワーク普及で製品の使い勝手はどう変わるのか?

2. 山田幸則氏

所属 トヨタ自動車株式会社 レクサス電子設計部 第4レクサス電子設計室 室長

題名 サステイナブル・モビリティに向けたトヨタの技術

3. 中村賢一氏

所属 メルパルク東京フロント副支配人・東洋大学大学院国際観光学修士課程・高崎商科大学短期大学部非常勤講師

題名 ホテルにおける顧客満足 -ホスピタリティ・マネジメント-2)SICE2006 におけるオーガナイズドセッションの企画

2) ワークジョブの開催

情報システムを社会に導入する際の人間中心設計方法に関する要求分析手法に関するワークショップを開催する予定である。

3) 関東支部大会におけるシンポジウムの開催

関東支部大会において、「ユビキタス時代のユニバーサルデザイン」をテーマにシンポジウムを開催する予定である。

4) 特集号の出版

学会誌において、「ユビキタス時代のユニバーサルデザイン」の特集号の出版を進める。

5) 幹事会の開催

年度計画、研究会部会の継続に関する審議を行うために、年に3度、幹事会を開催する予定である。

(3) 期待される成果

ユビキタス社会の到来を迎えて、人間にとって生活を豊かにするシステムの開発をするための方法論をより進めていくとともに、それらの成果を特集号を通して広く学会員に広げていく。

4-8. 聴覚コミュニケーション部会

{部会長: 江袋 林蔵}

<H16. 4. 1~5年以内>

聴覚コミュニケーション部会は、分散している研究の成果を収集し研究者間で共有できるようにすることを当面の目標にし、人や組織・集団等に関する研究活動の充実を図り、部会員相互ならびに関連する分野の国内外の実務家や研究者および利用者等との情報交換を通し時宜に適応した活動を行っている。

平成19年度は、上記趣旨展開のための下記各種活動を行う。

- (1) 部会活動の外部への情報提供
- (2) 部会幹事会の開催
- (3) 部会会員間の内外情報の流通
- (4) 研究会の開催(部会主催・共催)
- (5) その他、共催行事等

4-9. 医療安全研究部会

{部会長: 土屋 文人}

<H19. 4. 1~5年以内>

(1) 活動テーマ

医療安全が社会問題化後10年近く経過した。この間様々な批判はあるものの行政、医療

機関、関連業界は医療安全確保のために努力を重ねてきた。当初は全く見向きもされなかった人間工学的研究が今や医療の分野で大きく認識されるようになったことはこの間の大きな成果といえる。医療安全を確保するために2度目の医療法改正がなされ、平成19年4月より施行された。これに伴い、医療安全は第2段階に入ったといえる。医療安全研究部会の活動も存続期間延長が認められたことから、第2期に入った。そこで今期においては、医薬品や医療機器のヒューマンインターフェース部分等の人間工学的研究方法の確立と普及を目指すと共に、総合的な医療安全を確保するための人間工学的研究の促進を図ることとする。

(2) 手段・方法

1) 医薬品関係

横幹連合の医薬品インターフェース調査研究会の中心的役割を果たすべく、製薬企業や医療機関を対象とした人間工学的研究の普及等を目指した研修会等の開催を行う。特に平成20年9月から表示が義務づけられる注射薬へのバーコード表示について、外観類似問題も含めて重点的に研究を実施する。

2) 医療機器関係

本年度は医療機器関連の人間工学的研究を実施する場となる施設が誕生したことから、当該施設の見学を実施するとともに、医療関係者を対象とした研修会を開催する。

3) 医療安全管理者関係

医療安全管理者等を対象として、人間工学の基礎知識の普及をはかるための講習会等を実施する(他団体との共催も含む)。

(3) 期待される成果

過去2回にわたって行われた医療法の改正で法的な面での整備は一段落すると思われるが、今後はその実効性が問われることになる。従って今後人間工学的視点からの検討が極めて重要になることから、上記各分野における講習会の開催や研究の促進により、医療機関、企業にとって人間工学がより溶け込むこととなると考える。

4-10. 衣服人間工学部会

{部会長:間壁 治子}

<H19. 4. 1~5年以内>

(1) 研究テーマ

「人間と衣服との関係の評価について」

人間と衣服との関係の評価方法を柱に、人体計測はもとより、衣服の設計条件からその機能性や安全性などの評価方法に至るまで諸問題について研究を進めていく予定である。また若手人材の育成も念頭に置き、勉強会や見学会なども開催していく予定である。

(2) 例会の開催 年2~3回程度開催予定

1) 第1回役員会

開催日:平成19年5月19日(土)

以降の詳細について決める。

(3) 期待される成果

引き続き、大学・学校関係者だけでなく、アパレル産業など幅広く部会への参加を呼びかける。参加型での勉強会や見学会などを企画し、衣服の縫製技術に関しても再教育できる場を提供したいと考えている。

また、先に提示された人間工学技術ロードマップにもとづき、当部会の役割を明確にし、研究活動のガイドラインについて役員を中心に作成していく。

4-11. 人間融合ロボット分野アカデミックロードマップ研究部 {部会長: 富田 豊}

<H19. 4. 1~5年以内>

本研究部会の平成19年度の活動は、

(1) 前年度執筆した経済産業省への報告書の本部会構成員が執筆した部分に関して、編集委員

会の許可を得て、「人間工学」43巻別冊として出版する。

- (2) 日本人間工学会(6月2日～3日、名古屋)、日本ロボット学会(9月13日～13日、千葉)、人工知能学会(6月18日～22日、宮崎)の学術大会において、アカデミックロードマップ(ARM)の特別セッション(オーガナイズドセッション)を設定し、経済産業省および3学会の研究を報告する。
- (3) 関東支部会でオーガナイズドセッション設定してもらい、本年度活動の中間報告をする。
- (4) 人間工学技術戦略委員会(委員長：藤田祐志氏)と協力し部会を発展させる。
- (5) このために、8月以降、10回程度の会合を予定している。日程、場所は未定。

4-12. 触覚インタラクション研究部会

{部会長：山本 栄}

〈H19. 4. 1～5年以内〉

(1) メインテーマ

触覚インタラクションの可能性を探る

触覚インタラクション研究部会は、ヒトの触覚という機能を機器やシステム等に反映させることを研究する部会である。

これまであまり顧みられなかったヒトの触覚に光を当て、触覚という機能を再認識し、触覚を機器等に反映する触覚インタフェースの開発研究を行なうことを本部会では目指していく。触覚と言うと、目の不自由な人のモノという既成概念を外し、より良い生活を実現するためのハードウェア、ソフトウェアを含めたシステム開発を目指すということである。もちろん障害をもっている人たちを排除するわけではなく、障害を持つヒトも含め、さらには健常者にとってもこの触覚を利用することにより、使い勝手が向上する、エラー、ミスを減らすことが可能となる等などの利点を追求するところにある。

(2) 本部会の企画

- 1) ワークショップの開催(H. 19. 5. 28～29)
- 2) ISO/TC159/SC4/WG9 会議を東京で開催
- 3) 6月2日、日本人間工学会第48回大会でワークショップを開催
- 4) 11月に関東支部大会でシンポジウムを企画予定
- 5) 平成20年3月頃 研究会を開催予定

今年度は本部会の広報と部会員の募集に力を入れることに主眼をおく。さらにメンバーの連絡にはニュースレターを作成する予定である。これにより、メンバー間の交流をはかり、研究会では完成された研究ではなく、研究途中のものをディスカッション中心にメンバーの意見交流を行なうことを考えている。

5. 認定人間工学専門家部会

{部会長：青木 和夫}

平成19年度は以下のとおり活動する計画とする。

- (1) 資格認定試験(A方式試験)を年1回、筆記試験免除条項の適用(B方式試験)を年2回程度実施する。
- (2) 人間工学準専門家、人間工学アシスタントの募集要領を作成し、第1回審査を実施する。
- (3) 再認定制度(生涯研修制度)を推進する。
- (4) 部会ホームページ、部会報、学会等を活用して部会員交流と本制度の対外アピールに努める。

V. 第17期役員選挙報告

(平成19・20・21年度)

【会長 1名】

齊藤 進

【副会長 1名】

青木 和夫

(五十音順)

【理事 19名】

青木 和夫	阿久津 正大	大久保 堯夫	垣本 由紀子	加藤 象二郎
岸田 孝弥	斎藤 真	齊藤 進	酒井 一博	三林 洋介
外山 みどり	土屋 和夫	富田 豊	中野 義彦	八田 一利
平柳 要	福田 康明	堀江 良典	吉武 良治	

【監査 2名】

四宮 孝史 間壁 治子

【評議員 391名】

青木 通佳	青木 和夫	赤松 幹之	阿久津 正大	浅居 喜代治
浅井 祐司	阿曾 洋子	麻生 勤	渥美 文治	有馬 正和
飯田 健夫	飯田 裕康	飯塚 好光	井口 弘和	池浦 良淳
池上 徹	池田 研二	池村 澄男	石田 敏郎	石原 恵子
石原 茂和	泉井 力	磯田 憲生	井谷 徹	市坪 誠
一ノ瀬 充行	市橋 秀友	泉 博之	出浦 淑枝	伊藤 謙治
井上 馨	井上 勝雄	井上 文彦	猪岡 光	今田 葉子
井村 尚久	岩切 一幸	岩重 博文	岩田 恭	岩永 光一
岩宮 眞一郎	植竹 篤志	上野 義雪	上野 俊夫	宇賀神 博
臼井 伸之介	内山 靖	宇土 博	畝 正二	宇野 宏
江川 義之	榎原 毅	遠藤 広晴	大内 啓子	大久保 堯夫
大久保 祐子	大倉 元宏	大島 正光	大嶋 伸雄	大須賀 美恵子
大杉 淳	太田 壽江	太田 博雄	大竹 哲夫	大塚 彰
大中 忠勝	大西 俊四郎	大西 範和	大野 央人	大箸 純也
大橋 信夫	大橋 智樹	大平 肇子	岡井 治	岡田 明
岡田 有策	岡林 繁	岡部 和代	岡村 俊彦	岡本 宜久
岡本 郁子	岡本 恵里	小川 克彦	小此木 国明	苧阪 直行
尾崎 博和	小澤 幸夫	落合 孝則	小美濃 幸司	雄山 真弓
香川 スミ子	垣本 由紀子	景山 望	梶井 宏修	片瀬 眞由美

片寄 隆正	勝浦 哲夫	加藤 象二郎	加藤 隆康	加藤 力
加藤 登紀子	加藤 麻樹	門尾 孝是	金沢 トシ子	金田 一男
金谷 末子	辛島 光彦	川上 満幸	川口 孝泰	川島 祥三
川野 常夫	河原 政人	神作 博	神田 太樹	菊池 安行
岸田 孝弥	北島 洋樹	北原 ゆり	北原 照代	北村 薫子
北村 正晴	木ノ上 高章	甲 洋介	木下 重博	肝付 邦憲
國澤 尚子	久保 博子	久保 雅義	久保田 富夫	神代 雅晴
久米 靖文	黒川 隆夫	黒田 勲	桑野 園子	桑原 邦寿
河内 まき子	鴻巣 努	小木 和孝	小嶋 高良	小谷 賢太郎
小長谷 百絵	小町谷 朝生	小松原 明哲	小山 裕徳	近藤 雄二
才木 常正	斎藤 真	斉藤 進	齋藤 むら子	西連地 利己
酒井 一博	境 薫	酒井 正明	坂下 哲也	阪本 清美
佐久間 航	佐々木 司	佐々木 正人	佐々木 美奈子	佐藤 望
佐藤 教昭	佐藤 みつ子	澤 貢	澤井 映美	三林 洋介
塩澤 友規	塩田 州史	篠崎 彰大	篠原 一光	四宮 孝史
柴 建次	柴田 碧	澁谷 智久	渋谷 正弘	渋谷 雄
下平 佳江	下村 武	下村 義弘	庄司 卓郎	城内 博
神宮 英夫	新村 洋未	新家 敦	壽里 伸一	鈴木 浩明
鈴木 まや	鈴木 玲子	鈴木 一弥	清宮 良昭	瀬尾 明彦
瀬尾 尚聡	関口 彰	千代 和夫	外山 みどり	大門 樹
埜田 和史	高尾 秀伸	高木 敬雄	高橋 信子	高橋 真理
高橋 裕一	高松 衛	田川 晋一	田久保 宣晃	竹内 由則
竹内 晴彦	武岡 元	竹田 晴見	竹ノ内 敏孝	嵩原 哲史
竹本 篤郎	城 憲秀	田中 敬司	田中 裕二	田中 良幸
谷井 克則	田村 徹	田村 博	田村 麻美	津久井 一平
佃 五月	辻 敏夫	辻村 裕次	土屋 和夫	土屋 敏夫
土屋 文人	露木 章史	寺内 睦博	戸上 英憲	時田 学
徳田 哲男	栢原 裕	富岡 慶	富田 明美	富田 勤
富田 豊	鳥井 正史	鳥居塚 崇	内藤 章江	中川 千鶴
中嶋 芳雄	中迫 勝	永田 雅典	中西 美和	中根 芳一
中野 義彦	中林 和彦	長町 三生	中村 敏枝	中村 肇
仲村 洋之	難波 精一郎	西 修二	西内 信之	西岡 基夫
西川 一男	西野 達夫	西村 涼	西山 勝夫	西山 修二
新田 収	農沢 隆秀	野田 聡	野見山 武徳	野呂 影勇
芳賀 繁	萩原 啓	長谷川 徹也	畑山 俊輝	八田 一利
花輪 啓一	馬場 宏一	林 春樹	林 喜男	半田 幸子
樋口 雅俊	久宗 周二	久本 誠一	平沢 尚毅	平野 和彦
平林 由果	平柳 要	福住 伸一	福田 康明	福場 良之
福本 正勝	藤家 馨	藤田 祐志	藤田 晃弘	藤原 義久
古郡 了	坊岡 正之	保坂 良資	細川 修二	細野 直恒
堀井 健	堀内 邦雄	堀江 良典	堀野 定雄	本多 薫
米谷 淳	前田 節雄	間壁 治子	牧下 寛	楨塚 忠穂
正田 亘	正守 一郎	増田 美恵子	町田 信夫	松岡 克典

松岡 敏生	松田 文子	松永 勝也	松原 行宏	松本 一弥
松元 俊	丸本 達也	三浦 佳世	三浦 利章	三上 行生
三上 功生	三澤 哲夫	三品 誠	水垣 州子	水垣 信威千
水谷 好成	水野 基樹	水野 有希	三戸 秀樹	皆川 克志
宮尾 克	三宅 晋司	三宅 仁	宮代 信夫	宮野 道雄
向井 希宏	武藤 敬子	村木 里志	村田 厚生	村本 淳子
村山 陵子	持丸 正明	茂木 伸之	森 健一	森 千鶴
森 博彦	森 みどり	森本 一成	八木 昭宏	八木 佳子
矢口 博之	谷島 一嘉	矢頭 攸介	安河内 朗	安河内 義明
八藤後 猛	柳堀 朗子	柳瀬 徹夫	山岡 俊樹	山口 孝夫
山口 喜久	山崎 信寿	山下 利之	山田 富美雄	山田 有佳倫
山羽 和夫	山本 栄	山本 敏雄	山本 博樹	山本 まどか
柚原 直弘	湯室 彰規	横井 孝志	横井 元治	横井 郁子
横森 求	横山 清子	横山 真太郎	吉川 徹	吉澤 誠
吉田 信彌	吉武 良治	吉村 勲	吉村 健志	依田 光正
蓮花 一己	若井 正一	渡辺 瞭	渡邊 順子	渡邊 裕
綿貫 茂喜				

以上

日本人間工学会会則一部会改正(案)

(現行会則)

第3章 会 員

第5条 会員は本会の趣旨に賛同し正会員2名の推薦を得て、入会手続きを経た者とする。
ただし、後に定める賛助会員については入会手続きを適用しない。

第6条 会員は名誉会員、正会員、準会員および賛助会員とする。名誉会員は本会に功労のあった者で理事会が推薦し、総会において承認を得た者とする。正会員は本会の目的に賛同しその活動に参加する個人で、別に定める会費を納めるものとする。賛助会員は本会の目的に賛同しその活動を援助する個人または団体で、別に定める会費を納めるものとする。会員は本会の行うあらゆる事業に参加することができる。

(改正会則案—施行予定月日:平成19年6月2日)

第3章 会 員

第6条 会員は次に定めるとおり、正会員、準会員、賛助会員および名誉会員とする。会員は、特に定めのない限り本会の行うあらゆる事業に参加することができる。

- 1 正会員は本会の目的に賛同しその活動に参加する個人で、別に定める会費を納めるものとする。
- 2 準会員は大学生又は大学院生もしくはそれに準ずるものであって、本会の目的に賛同して入会した個人で別に定める会費を納めるものとする。
- 3 賛助会員は本会の目的に賛同しその活動を援助する個人または団体で、別に定める会費を納めるものとする。
- 4 名誉会員は人間工学に関わる学識経験を有し本学会に顕著な貢献を行った正会員で、別に定める手続きにより、総会の議決をもって名誉会員に推薦され、その推薦を受諾した者とする。名誉会員は会費を納めることを要しない。

参考資料

日本人間工学会会則第6条第4項の規定を受けて定められた「名誉会員推薦細則」は、次のとおりで、施行は平成19年6月2日となっている。

【名誉会員推薦細則】

- 第1条 本細則は、日本人間工学会会則第6条に定める名誉会員の推薦方法について定める。
- 第2条 名誉会員として推薦される者は、当該年度の定期総会開催日において70歳以上で、かつ次の各号のいずれかに該当し、正会員5名以上から推挙された者とする。
- 1 正会員として30年以上本会に在籍し、理事もしくは支部長を9年以上務めた者
 - 2 その他、本会に特別の功労のあった者
- 第3条 第2条における年齢及び年数の基準は、当該年度の定期総会開催日とする。
- 第4条 第2条によって名誉会員候補者となった者に対して、本人の意思確認を行い、理事会において総会への推薦に係る審議を行う。なお、本人が正会員のままと希望する場合はこれを妨げない。

付則

- 第1条 本細則の改廃は、理事会の議決を必要とするものとする。
- 第2条 本細則は平成19年6月2日より施行する。

以上